

古史傳

第百四十九段
富士山之段

三十一

和書門			
冊	架	函	號
一	一	三	一
〇	二	一	八
			四
			二
			五
			一
			八
			類

內閣文庫			
冊	架	函	號
一	一	三	一
〇	二	一	八
			四
			二
			五
			一
			八
			類

內閣文庫	
番號	和 42518
冊數	40 (36)
函號	140 185



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



古史傳二十一之卷

平島風雲

神代下十二之卷

爾木花中佐久夜昆賣命誓言
有驗而後奉恨皇美麻命而不

男	平田兼胤	檢閱
門人	矢野玄道	編攷
孫	平田胤雄	技
門人	角田忠行	訂
同	井上朝國	

九十四百

古史傳三十一之卷

平篤胤謹撰

カニヨノレモツキトヲリヒトキトウキ
神代下十一之卷

男	平田鐵胤	檢閱
門人	矢野玄道	續攷
孫	平田胤雄	技
門人	角田忠行	訂
同	井上賴圀	

爾木花出佐久夜毘賣命誓言言

有驗而後奉恨皇美麻命而不

與共言出故皇美麻命憂出歌
曰意伎都母波倍邇波余禮杼
母佐禰杼許母阿多波怒加母
用波麻都智杼理用焉歌矣後
久坐而天津彥火瓊瓊杵命崩

坐御陵者即在筑紫日向埃出
山也故是佐久夜毘賣命者坐
駿河国福慈岳淺間社也
奉恨之前よ皇美麻命此多一
疑嘲給し事を怒恨給あゆ。○不與共言之師の訓ふ従れ
ど又阿比以波受とも訓はし其は師説よ穴穗宮段よ我
所相言之嬢子者云く万葉十一ふ相言始而者又相語而

同卷ふ左祿度波良布母と有て佐寐所掃ふては後言と
 る等多く見えたる佐と眞均き佐祿の略語此添言と
 多狭夜狭衣等の佐了あて眞の意あてと云て○阿多波
 怒加母用た契冲説ふ不與哉とれゆ雄略天皇紀も童女
 君者本是采女天皇與一夜而脈云くとある與あてと云
 流を用たし釋紀ふ不能鴨也と云る説を惡し此久老主も
 人よ物をあふと云も彼よ觸るを云言おれむ此も寐
 處よ不觸を何と云ぬとハ云るあり古事記輕太子の御
 歌よ夜須久波陀布礼を捨とる助辞あて○玄道云或人云
 觸ふ同じ下の用た呼捨とる助辞あて○玄道云或人云
 來而相寐せぬ哉と歎のせ給あり哉も歎息 ○波麻都智
 ありよ又與を添て云る事古歌も多あり
 杼理用た古來此説皆濱津千島とあてと云るが如し契
 冲説ふ藻ハ柔軟ふして能靡く物ある故ふ女了喻ふ万

葉集ふ奥津藻の名延此妹を詠流是れ也千鳥を夜まの
 ら鳴て雌字呼物なまバ獨寢の眠を覺意を寄給流あ
 也。○玄道云久老主も濱辺此千鳥の夜まがら鳴あう
 或人の如く夜を鳴あかまと云意を云殘とるありと云又
 難波津ふて詔あて小野篁朝臣の隠岐島牙流れれは時
 告よ海人の釣舟此の原八十島のけてあぎ出ぬと人よ
 歌よ習るなる流しを寄も説也後了顯昭註を見まハ譬バ
 お逢まじき事ぞうしを濱千鳥よ云聞まする心あるべし
 と云て死さて此鳥の事或説よ万葉集よ多登理布美多
 中よ十七朝獵鳥五百津鳥とて夕狩了知登理布美多
 底も有ハ五百津鳥對たまを聞るも有と鳥と登理布美多
 あり其外ハ五百津鳥一種の鳥れ名を聞るも有と鳥と登理布美多
 帖六了山河の石間隱ふ住千鳥と詠るも有と鳥と登理布美多
 も聞まじの猶いかゞあらむ和泉式部集四詞書よ水邊
 みちぢりの只一つ立るをみてと書るをそ慥ある證

と云、免、字鏡集九、倭玉篇鳥部、節用集活板、知部等、行鳥の義を取て、鶴字を、かしおの字書に見え、あ、よ、て、千鳥の義を取て、作出し、字了、や、也、く、千鳥、む、ま、と、る、千鳥、風、み、也、く、等、詠、る、歌、多、の、ま、む、ち、り、云、く、磯、千鳥、浦、千鳥、河、千鳥、百、千鳥、群、千鳥、友、千鳥、友、無、千鳥、岩、千鳥、等、も、云、り、八、雲、御抄三、下、藻、塩、州、十、其、名、を、載、ら、ま、と、り、千鳥、の、跡、と、詠、る、ハ、古、今、雜、下、志、ま、む、時、忍、を、て、濱、千鳥、行、か、も、知、然、跡、を、留、る、朝、忠、集、よ、白、浪、の、打、出、る、濱、の、濱、千鳥、跡、や、尋、る、ある、べ、あ、る、ら、む、貫、之、集、下、白、浪、の、打、返、せ、も、濱、千鳥、猶、ふ、こ、つ、つ、け、て、跡、を、留、よ、此、等、を、始、ふ、て、甚、多、の、り、と、見、也、
○後久坐而を。本書よ。此ふは後字無れど。彦火く出見尊
の所ふ有む。其例ふ據て加。通證の一説ふ。久之者。治安
積年不知歴數。太古文法也。と云ふ如く。其歴數此知まざ
る義了は有と。亦知はき道も有て。委曲よ稽るふ。彼天降
坐て。大嘗聞看る。大歳を。白檮原宮ふ天下知し。看依神武

天皇の元年辛酉歲と。二千四百年前の辛酉歲ふ當て。
其御世は間を。大凡一千五百三十一年許ふて。其御子生
ま。免賜は。其御世の末あを思由あり。其説長ければ。
別ふ著る。弘仁歴運記考を見て察於べし。通證よ。正通曰。一説、迹、く、杵、尊
治世三十一万八千五百四十三年。今按見倭姫命世記。或
曰。自甲寅至丙戌等云。は類ハ。都て無稽の説也。も形ゆ。○
玄道云。此第百六十三。○崩坐を。本書ふ。崩字は。ふれぞ。
段ふ引出るを見。は。○崩坐を。本書ふ。崩字は。ふれぞ。
加牟阿賀理麻志奴。と訓る。據りて。坐字を加。つ。但神武
天皇の崩をバ。加牟阿賀理志麻志奴。と志て。ふ言我添て
訓とれど。其師説ふ從て用。其師説ふ。神上と云。本
云。あせる物あれ。直坐ぬ。と。連難。な。ま。バ。爲。坐。ぬ。と
云。ぞ。正。の。る。べ。き。然。れ。ど。然。訓。て。何。を。の。や。中。く。ふ。穩。あ

み、の、界、よ、生、於、と、の、己、の、下、延、置、て、打、嘆、た、妹、が、去、む、等、も、
ろ、黄、泉、の、待、む、と、隠、の、沼、の、葉、延、置、て、打、嘆、た、妹、が、去、む、等、も、
詠、と、れ、ど、此、等、古、の、案、も、叶、又、其、言、後、の、物、語、書、等、
み、黄、泉、路、の、急、黄、泉、づ、と、等、も、云、世、此、言、種、も、黄、泉、路、返、
と、み、返、等、云、馴、て、終、み、人、の、魂、も、あ、べ、て、黄、泉、
み、往、て、ふ、古、傳、の、如、く、な、も、誤、り、來、ふ、け、る、
神、靈、は、正、了、天、ふ、上、坐、る、故、事、と、景、行、天、皇、紀、ふ、日、本、武、尊、
を、葬、奉、る、處、よ、即、詔、群、卿、命、百、寮、仍、葬、於、伊、勢、國、能、褒、野、陵、
時、日、本、武、尊、化、白、鳥、從、陵、出、之、指、倭、國、而、飛、之、群、臣、等、因、開、
其、棺、櫬、而、視、之、明、衣、空、留、而、屍、骨、無、之、於、是、遣、使、者、追、尋、白、
鳥、則、停、於、倭、琴、彈、原、仍、於、其、處、造、陵、焉、白、鳥、更、飛、至、河、內、留、
舊、市、邑、亦、其、處、作、陵、故、時、人、號、是、三、陵、曰、白、鳥、陵、然、遂、高、翔、
上天云くを有る是ふて天皇祖神等の御許も參上賜な

古、事、記、ふ、此、事、を、載、ゆ、了、ハ、亦、自、其、地、更、翔、天、
記、傳、ふ、此、翔、天、字、ア、一、ガ、ケ、リ、と、讀、て、神、賀、詞、み、天、
氏、云、く、万、葉、五、み、久、堅、の、天、此、御、虚、也、阿、麻、賀、氣、利、
を、引、て、書、紀、上、天、と、有、例、此、漢、籍、免、の、し、く、書、
と、有、等、の、み、お、そ、有、免、実、み、天、上、へ、登、坐、る、と、あ、ら、
と、有、文、の、如、く、見、お、そ、有、免、実、み、天、上、へ、登、坐、る、と、あ、ら、
唯、此、記、の、言、く、見、お、そ、有、免、実、み、天、上、へ、登、坐、る、と、あ、ら、
を、差、あ、る、言、く、見、お、そ、有、免、実、み、天、上、へ、登、坐、る、と、あ、ら、
あ、る、ま、や、此、ハ、強、て、漢、說、み、似、往、る、を、惡、且、強、て、も、人、を、死、れ、
バ、等、も、昇、き、押、竝、て、根、底、固、み、似、往、る、を、惡、且、強、て、も、人、を、死、れ、
ま、し、み、て、記、傳、中、み、ま、さ、お、き、非、み、自、説、字、立、む、と、せ、ら、
翔、ち、ふ、語、を、上、第、百、十、四、段、み、神、賀、詞、み、因、て、載、れ、さ、て、称、
德、天、皇、紀、云、元、正、天、皇、の、遺、詔、を、朕、必、天、翔、給、天、見、行、之、退、
給、比、捨、給、比、云、く、を、詔、由、見、え、空、穗、物、語、俊、蔭、卷、み、吾、去、く、
せ、の、が、れ、ざ、り、け、る、を、天、翔、て、も、い、う、み、の、ひ、な、く、見、給、ら、
む、親、の、お、は、せ、し、時、先、死、ま、し、物、を、又、固、讓、卷、み、天、翔、て、も、
見、給、と、泣、の、せ、し、給、を、云、榮、花、物、語、玉、村、菊、の、卷、中、務、宮、
の、聖、の、御、あ、と、み、い、の、ち、た、え、て、り、く、て、は、片、時、さ、ゆ、は、へ、
そ、あ、れ、と、あ、ま、の、け、り、ゆ、て、も、お、の、わ、と、正、を、片、時、さ、ゆ、は、へ、
ら、を、見、え、源、氏、物、語、澤、標、卷、よ、降、乱、れ、空、き、一、み、ひ、ま、な、
き、と、何、正、そ、ら、を、あ、き、人、の、天、翔、ら、む、宿、そ、哀、き、又、若、菜、卷、

よ。中宮の御事もてもいと嬉しく辱しとあむ。天翔ても見奉らば。道異は成ぬれハ云く。等も記し。大鏡も九條右大臣。此四宮の最後の時了。申。語。天翔ても御覧せと。多武峰少將物語も。第君の。見えて。哀ある。おひし。給る。ま。天翔ても。尋訪。む。云く。家長記。ふ。い。わ。け。あ。く。親を失。ま。ま。し。こと。を。い。ひ。て。あ。き。魂。の。天。の。け。ゆ。見。給。ふ。ら。む。い。の。む。か。り。あ。る。ら。む。と。思。ひ。つ。づ。け。ら。れ。て。と。い。ひ。又。後。あ。が。ら。今。川。貞。世。が。道。往。ぶ。り。み。天。が。り。ゆ。て。も。み。そ。な。は。し。賜。ら。せ。と。も。又。此。歌。の。心。を。天。翔。て。も。は。ち。り。賜。等。云。る。た。万。葉。集。も。鳥。翔。成。有。我。欲。比。管。見。良。目。母。又。延。喜。六。年。竟。宴。歌。も。渡。飛。加。翔。留。阿。麻。能。伊。波。布。祢。等。詠。る。と。大。抵。六。年。類。と。る。詞。も。て。翔。降。由。あ。る。が。共。ふ。師。説。の。徴。を。安。べ。し。儲。然。天。ふ。は。上。給。れ。ぜ。仍。其。陵。ふ。も。鎮。坐。依。事。の。諦。き。證。は。仁。德。天。皇。紀。も。六。十。年。冬。十。月。差。白。鳥。陵。守。等。充。役。丁。時。天。皇。臨。于。役。所。爰。陵。守。目。杵。忽。化。白。鹿。以。走。於。是。天。皇。詔。之。曰。是。陵。自。本。空。故。欲。除。其。陵。守。而。甫。差。役。丁。今。視。是。恠。者。甚。懼。之。

無動陵守則且授土師連等と見えある是あり。上件三陵の御陵の陵守と云事詳知らぬ了似とまど白鳥陵守等と有て其所の陵を無文を思ふ三陵の守者等あるは。○玄道云。あは此大宮近邊あるは。從て有。寔。ふ。是。陵。證。み。河。内。國。古。市。郡。の。せ。は。は。從。て。有。寔。ふ。是。陵。等。は。本。々。正。其。尊。骸。を。坐。ぬ。ぞ。彼。地。ふ。留。る。御。靈。は。鎮。坐。哉。天。皇。の。然。を。所。知。看。ま。本。々。正。空。陵。は。ま。ば。御。靈。の。御。坐。は。じ。く。然。て。は。陵。守。を。置。む。も。無。用。あ。依。事。れ。正。今。々。正。後。を。除。て。む。と。欲。て。先。御。試。了。甫。て。役。丁。ふ。差。賜。る。が。猶。何。ふ。有。む。と。御。心。元。外。く。も。所。思。看。ら。む。故。も。其。所。に。臨。て。見。行。る。御。有。趣。あ。正。然。は。依。其。陵。守。等。の中。ふ。目。杵。を。云。依。者。は。忽。ふ。か。依。恠。は。有。け。ま。ば。空。陵。了。は。有。と。神。靈。の。正。ふ。鎮。御。

坐て。是恠^{シキレ}を視賜^シる事を甚く懼^{カシ}坐て。殊^カ小重く。土師連等
小授給^{ヨサレ}は由^レあ^レ。是^レふて神靈^{ミタマ}は。天と地と二道^{ニミチ}小分^{コバカ}坐^シは
坐事を惟^ヒ定^ムは^シ。土師連等^{ツチノシリノリノ}の陵墓^ノを司^シる部^ノある故^ニ小授^テ。
賜^ルるあり。然^レて其^ノ目^ノ杵^ノて^ハ人の化^シに^シし白鹿^ノを^シて。現^シ身^ノか
み成^リら^ズむ。知^ルら^ズも。王^ノ此^ノ神^ノ態^ノに^シ暫^シ然^ルる形^ノを^シて。賜^テ給^フは^シ事^ノ。
あ^らぐら^に其^ノ御^ノ府^ノを^シ召^ス賜^テて。其^ノ使者^ノの中^ニに^シ仕^ス奉^ルし^テ給^フは^シ事^ノ。
申^スも更^にあり。又^も此^ノを^シ准^テて。王^ノの白^ク鳥^ノの形^ノを^シて。見^ル賜^テ給^フは^シ事^ノ。
の御^ノ態^ノあり。由^レを^シも。同^シ奉^ルべ^シ。此^ノ等^ノは^シ事^ノ等^ノ。猶^も景^ノ行^ル天皇^ノの
御^ノ卷^ノを^シ委^ク云^フを^シ俟^テは^シ。○玄^ノ道^ノ云^フか^ク事^ノ等^ノ。猶^も景^ノ行^ル天皇^ノの
魂^ノの鎮^シ坐^シ證^ハハ。天^ノ武^ノ天皇^ノ御^ノ世^ノに^シ言^フ代^シ主^ノ大^ノ神^ノは^シ御^ノ詔^ノも^シ御
武^ノ天皇^ノの御^ノ陵^ノを^シ祀^テ賜^テは^シ。告^ス奉^ル賜^テ神^ノ詔^ノハ^シ更^にあり。垂^テ仁^ニ
天皇^ノ仲^ノ哀^ノ天皇^ノ神^ノ功^ノ皇^ノ太后^ノ應^シ神^ノ天皇^ノ雄^ノ略^ノ天皇^ノ又^も天^ノ智^ノ天^ノ
皇^ノ桓^ノ武^ノ天皇^ノ光^ノ孝^ノ天皇^ノ醍^ノ醐^ノ天皇^ノ崇^ノ德^ノ天皇^ノ等^ノを^シ初^メ奉^ルて。西
土^ノみ^もて^ハ古^ノ々^ノ女^ノ媼^ノ氏^ノ申^ス余^ノ氏^ノ孔^ノ丘^ノ等^ノを^シ更^にあり。其^ノ他^ノも^シも
數^ノ知^ルら^ズい^も多^ク聞^クえ^テ。正^ノ墓^ノを^シら^ズぬ^レ地^ノも^シ然^ル唱^テ來^ルも^シも
處^ノ其^ノ魂^ノの留^ルる事^ノも^シ古^ノ史^ノ徴^ノを^シ見^ルえ^テ。比^レ婆^ノ之^ノ山^ノさ^テ
ハ^シ柿^ノ本^ノ人^ノ磨^ノ主^ノ又^も清^ノ少^ノ納^ノ言^ノ白^ク拍^ノ子^ノ静^ノ女^ノ等^ノも^シは^シる^レ事^ノ有^リ

て。數十葉^トあら^ズむ。盡^シ難^クは^シ。ち^て仲^ノ哀^ノ天皇^ノ紀^ノ。穴^ノ門^ノ豐^ノ
れ^バ別^ニ記^スる^レ物^ノ有^リを^シ見^ルは^シ。浦^ノ宮^ノ小^ノ御^ノ坐^シは^シ時^ノ了^ル。皇^ノ后^ノ小^ノ神^ノ託^シ坐^シて。新^ノ羅^ノ罔^ノを^シ伐^テ給^フと^シ御
誨^レ有^リける^レ。天^ノ皇^ノ爲^シ詐^シ神^ノと^シ。信^ノ賜^テは^シし^り。婆^ノ其^ノ神^ノ大^ノ忿^ノ
して。凡^ソ茲^ノ天^ノ下^ノ者^ノ汝^ノ非^ニ應^ズ知^ル罔^ノ汝^ノ者^ノ向^テ一^ノ道^ト。詔^テ賜^テは^シ事^ノの
。あ^らむ其^ノ時^ノ小^ノこそ。未^ダ何^ノ神^ノを^シも所^レ知^ラば^シ。後^ニ小^ノ御^ノ名^ノ
告^リ有^リし^り小^ノ依^テむ。天^ノ照^ノ大^ノ御^ノ神^ノ小^ノ坐^シを^シ孔^ノ畏^ル其^ノ大^ノ命^ノを^シ信^テ賜^テは^シ。
爲^シ詐^シ神^ノと^シ。牙^ノ申^ス給^フは^シ。大^ノ忿^ノし^り賜^テ事^ノ宜^クあり。故^ニ汝^ノを^シ。茲^ノ天^ノ
下^ノ戎^ノ勿^ク知^ラ看^ルそ。一^ノ道^ト小^ノ向^テて。天^ノ上^ノを^シ勿^ク上^ルそ。と^シ詔^テは^シ。阿^ノ
那^ノ加^ノし^り。此^ノ向^テ一^ノ道^トと^シある^レ言^ノの意^ノを^シ記^ス傳^ス。黄^ノ泉^ノ罔^ノ了^ル罷^ル。
一^ノ道^トあり。坐^シと^シの謂^フあり。其^ノは^シ天^ノ下^ノに^シ諸^ノ道^トあり。黄^ノ泉^ノ罔^ノ了^ル罷^ル。
を^シ統^テて^ハ周^ノ徧^ニみ^も對^シて^ハ。何^ノ處^ノも^シま^れ一^ノ罔^トは^シ。一^ノ方^トも^シ片^ノ徧^ニて^ハ。

編りらざる故みかく詔るあり道とてかくて幾久も有
向と有ふ由る御言ありと説れとてかくて幾久も有
び。天皇命崩坐しり。懿皇后を始建内宿禰等驚懼て坐殯
宮をあゆ。此事を書紀よは。殯于豊浦宮。爲無火殯斂と有
て。無火殯斂。此云寝那之阿餓利とあり。此阿餓利即神上
れ阿賀理と同じ。其は万葉考ふ。殯宮を阿賀理能宮と訓
て。崩坐は先宮中ふ。殯宮して。假ふ斂奉。山陵造る後ふ。
葬奉ぬ。とて此紀文を引。此阿餓利れ言。即殯ふ當。と
云れぬ。但し其頭書ふ。万葉四卷。大荒城乃。時尔波不有
理。此約。とる。阿賀理と阿羅紀。同言あり。と有。此を記傳三
十卷の細注ふ。擧て阿賀理と阿羅紀。同言あり。と有。此を記傳三
い。か。ぶ。ある。説ふ。て。如く。け。て。師説ふ。天皇了神阿賀理と申

此みあら。皇子等れども。天所知あを申し。凡人ふも。
然る趣ふ云。故事有る。皆同じ。か。れば。死志時の事。茂も。
天ふ上を。此れ事と云。意ふて。阿賀理とは云ふ。加茂翁
人。今も人の死。第三日の事。ある。三日のあがり。江
と云。送。上。る。事。と云。意。ふ。て。同。事。を。云。○頼因云。東京の
俗言。ふ。動物の死。をあぐる。と云。ハ。此。意。み。合。子。云。け。て
如此人れ。死。上。を。云。と。轉。て。凡。事。れ。成。畢。を。出。來。上。る。
成。畢。を。爲。上。等。云。事。多。し。と。何。也。此。師。説。を。記。傳。十。八。卷。此
十。卷。の。二。十。九。葉。殯。宮。の。處。注。れ。四。十。一。葉。崩。字。の。所。又。三
但。本。書。尚。此。説。中。凡。人。の。死。を。注。れ。と。る。説。を。合。取。て。記。り。
事。残。忌。憚。り。其。反。を。天。皇。の。崩。を。神。上。と。申。す。根。因。ふ。幸。と。申。
彼。僧。の。書。も。長。と。云。葦。を。余。斯。と。反。を。云。が。如。し。と。云。玉。く
し。げ。の。書。も。神。も。人。も。善。も。惡。も。死。む。皆。黄。泉。因。ふ。往。事

等ハ全く死者ハ天ヨ上るといふ傳也。集中多のゆゑ。志の
まばあも皇孫の天ヨ此ゆめまじゝを志怒びまじら
故ヨ雲をしもこのハ恥もほしめけり。實ゲも上件此
也。と説るハ。案ヨ信あること。ふざけけり。實ゲも上件此
説等トモの如く。阿賀理アガリと云、身ミ死シる事コトヨ云、語コトとあまじし故
了。又其言コト我レ忌嫌事シキミも起レせ。其コトハ仲哀天皇紀此一説ト。
彼御誨ミサシ有リし神ノ。皇后オホキサキふ託カて。御名ミナ告ツ坐マはシふ。速ハヤ狹サ騰タ尊ノと
詔ミコトノコト依ヒを。天皇キコシ所聞シ看ミて。聞キ惡事アクシ之ノ言コト。坐マ婦人メナカモ乎カ。何言ナニカモ速ハヤ狹サ騰タ
也。と詔ミコトノコト由ヨ所見シと依ヒふて知ル。師シ云ク。速ハヤ狹サ騰タ尊ノ。天照
大神オホミカミ。天アメ御柱ミハシ以テ。天アメ上ノ送マ上ノ奉マ給マ。天アメ上ノ小騰コト坐マる由ヨの
御名ミナあり。万葉マンヤフふも。指サシ上ノ日ヒ女メ之ノ命ミコトを有リ。如シ。貴人キヒトの死シ坐マ
聞キ惡事アクシと詔ミコトノコトは。早ハヤく騰タる。と云ク。事コトを忌ヒて。あハ。貴人キヒトの死シ坐マ
を。阿賀理アガリ坐マと云ク。故ユ取リ。○玄道ソノミチ云ク。高橋タカハシ氏ノ。文フミある。景行ケイコウ天
皇ミカドの磐イハ鹿カ六ム。藤フジ命ミコトの御魂ミタマ上ノ詔ミコトノコト賜マる。宣命ノリノミコトヨ。空ソラ津ツ御魂ミタマと詔ミコトノコト。
賜マひ。又マタ卒ソ上ノと有リ。身ミ罷マ上ノ。あらむ。と或人ナニカヒト説ク。鎮魂チンコン歌ウタヨ。

みとまあがり。あがり坐マし神カミを。見え。齋明サイメイ天皇紀テマカヒの御
歌ウタ。万葉集マンヤフを依ヒ。歌詞ウタノコト又マタ神樂歌カミガク。天アメヨ坐マ。豊トヨを。り。比賣ヒメ此コ宮
此コ。て。て。ぐら。を。詠ユ。て。その。和魂ニギハヤヒ野推ノノシ神カミも。天アメ上ノ。坐マ。し。又マタ早
良ヨシ。親王ミコノミ。菅原スガハラ。天神アメノカミの。天アメ。固カタ。上ノ。坐マ。志シ。正ただ。き。徵シ。等ト。有リ。て。件ツグ。師シ。説ク
多オホク。本ホ。を。して。別わか。れ。也ナリ。○御陵者ミヤノシラノモノ。即ツ在ア。筑紫ツクシ。日向ヒナタ。埃アヒ之ノ山ヤマ也ナリ。
前サキ。ふ。は。御紀ミキの。文フミ。小據コト。と。れ。也ナリ。今イマ。古事記コトワザの。文法フミカタ。小據コト。也ナリ。
埃アヒ。字ジ。ハ。御紀ミキ。ヨ。可コ。愛アヒ。之ノ山ヤマ。と。書キ。て。可コ。愛アヒ。此コ。云ク。埃アヒ。師シ。説ク。ヨ。御陵ミヤノシラ
と。有リ。と。下シ。引ヒ。諸陵シラノ。式カタ。ヨ。埃アヒ。山ヤマ。と。有リ。と。依ヒ。也ナリ。師シ。説ク。ヨ。御陵ミヤノシラ
は。美波ミナ。加カ。を。訓ツ。改カ。し。万葉マンヤフ。二ニ。ふ。八隅ヤスミ。知チ。之ノ。和期ワキ。大オホ。王キミ。之ノ。恐オソ。也ナリ。
御陵ミヤノシラ。奉仕ホウジ。流山ルシ。科カ。乃ノ。鏡山カガミヤマ。爾ニ。云ク。賀茂翁カモウヂ。此コ。考カウ。ふ。古コ。は。天皇テマカヒ
此コ。山陵ヤマノシラ。も。御基ミタマ。と。ぞ。云ク。お。ら。む。此コ。も。御陵ミヤノシラ。を。は。書キ。と。れ。也ナリ。
み。さ。づ。死シ。とは。訓ツ。難ガタ。く。必カナラ。み。は。の。を。訓ツ。る。れ。也ナリ。也ナリ。也ナリ。也ナリ。
也ナリ。仁德ニトク。天皇紀テマカヒ。推古スエホ。天皇紀テマカヒ。あ。ど。も。難波ナニハ。荒陵アラノシラ。と。云ク。地チ。名ナ。も
也ナリ。源氏物語須磨卷ゲンジモノトコノスミノマキ。院インの。御ミ。は。り。を。云ク。御山ミヤマ。と。も。あ

古書も御陵を築を山作と云り。○玄道云。或人云。波
加ハ終處の畧。新撰万葉集。いばお葬處。人の
とひあむと見え。空穗物語。嵯峨院。卷。そおはか
あは。だし。源氏物語。帚木。卷。そおはか。けしき
ぞめ。高光集。神無月。風。紅葉。のち。時。そおはか
となく。物。ぞ。哀。き。小馬。命。婦。集。そ。お。は。か。と。け。し。き
なき。言。の。葉。の。さ。あ。ぐ。あ。又。美。佐。邪。紀。と。云。も。古。死。稱。お
の。ぬ。け。さ。ぞ。恋。し。き。等。あ。○玄道云。類聚名義抄。よも。又
和名抄。山陵美佐々岐。○玄道云。類聚名義抄。よも。又
諸陵寮美佐々岐乃豆加佐と云。但某天皇此御陵おど
云。せきた。美波加せ云。げく。其御陵を指ては美佐邪紀せ
も云。げし。あ。と。牙。バ。某。処。の。美。佐。邪。紀。を。某。天。皇。の。美。波。加
云。ざ。せ。ぞ。あ。ど。云。む。む。如。し。某。天。皇。此。美。佐。邪。紀。お。ど。を
け。む。凡て同物も指さは。お。依。て。名。れ。の。は。る。類。多。し。後
世。お。せ。る。は。陵。を。ば。凡て美佐邪紀と申て。墓と別。お。せ

とれ。ま。り。せ。有。せ。記傳此。下。お。美。佐。邪。紀。の。事。を。下。卷
ど。其。説。その。卷。信友説。ふ。靈異記。ふ。點地。作。冢。殯。收。云。く。せ
お。は。見。え。び。注。み。點。佐。岐。と。見。え。字。書。み。點。檢。點。也。と。も。あ。り。て。
有。せ。此。文。地。を。檢。と。て。定。て。作。冢。殯。し。て。收。置。と。る。由。あ。せ。
然。れ。は。サ。ク。せ。は。お。せ。活。用。て。地。を。檢。察。と。る。定。る。せ
う。の。言。れ。せ。故。按。み。も。せ。は。大。御。墓。地。を。檢。察。定。と。協。所。を。
こ。サ。キ。せ。申。し。御。を。藏。奉。て。こ。ハ。カ。せ。申。る。れ。せ。然。る。哉
後。ふ。こ。ハ。カ。と。申。事。を。忌。む。こ。サ。キ。と。は。申。儆。る。お。せ。御。陵
を。御。山。と。云。御。陵。作。を。山。作。あ。ど。云。せ。云。せ。け。て。此。御。陵。の
る。も。同。意。み。て。此。を。又。後。の。唱。れ。せ。事。は。ま。お。師。説。ふ。延。喜。諸。陵。式。ふ。日。向。埃。山。陵。天。津。彦。々。火
瓊。瓊。杵。尊。在。日。向。罔。無。陵。戸。せ。出。と。れ。ど。日。向。罔。ふ。は。有。る

あらび。口訣ふ可愛之山陵在日向宮崎と云るを心得
不得近焉是可愛陵歟又或人云曰杵郡縣西三里有大陵異氣甚盛而
神社あり傍百町餘山あり絶頂ふ靈石三尖は岩洞あり
是可愛陵あり又或人云今日日向宮延岡の領内ふ幸ふハ
ち可愛と云所ありてそふ山と云り山腹ふ神
社あり御陵を何れ此やどふ在とも詳は知り又或人
云曰杵郡高千穂山の東南北方ふ榎の嶽と云山あり其
山中ふ迹く藝命此陵ありを云あり里人大石明神と申
ひありあど云曰何れも古く故ある地とは聞えとれぞ
可愛御陵ふハ前王廟陵記ふ今薩摩国穎娃郡を云曰然
非じとぞ思ふ

るはし和名抄ふ薩摩国穎娃乃郡穎娃郷是あ也。紀伊の

伊字あどの例よて工の音の韻を添とる此みあり今国
人ハえいぞ云其も工を長く引て呼あり文字を舊此ま
るふ穎娃と書或も江居とも書ゆ和御陵必此處ふ在る
名抄ふ江乃とある乃字を削るべし薩摩国人ハ云可愛山陵を薩摩国高城郡水引郷五臺

村中山ハ巔ふ何也。天書ふ瓊瓊杵尊云く葬筑紫日向縁
之中山之巔陵也。と見えふ也。篤胤云是引とる天書の文
と云もの甚誦き物あり信
又川合陵端陵と云て二あり今俗ふ中山陵をば中
陵と云て中ふあり瓊瓊杵尊此陵と云也。川合陵を其左
端陵を其右ふ在也。此二陵をバ天照大神と忍穗耳尊の
陵ありと云を非あり古帝皇を葬る
或も三陵を營ひ一を聖躰を残さぬ餘を輜車及服御の
物等を藏ぬ三墓を合て其帝皇山陵と云るあり然れど
此三陵合て瓊々杵尊の山陵あり其
中ふ玉躰を藏奉るを中陵あり
今見ゆふ此中陵ふ
は其巔安磐石二尚如壙城周圍以并韓世命修之其石最
大如俗謂片石非神功不能輸山上他二陵則無之まこ此
陵の右了。新田宮と云何也。瓊瓊杵尊を祀る。天照大神栲

陵を今薩摩国高城郡水引郷宮内村新田宮に鎮坐す。八幡山其れをすし。然るは昔とて瓊瓊杵尊の御陵是處に在りと云傳れど也。薩摩国を本日向国内にあれど神代紀造らば頃を既し薩摩国あるを日向国に在るとしも記れと依る猶神代紀の文に據れしを見ゆさて今是新田宮に坐す神を中位を瓊く杵尊の御陵とて傳む有る事は千姫命を別殿に應神天皇と武内宿禰命を祭ると云ふ。然るも昔とて此邊に埃をいふ地を死が如ある故に吾が国の識者等も左も右も疑思事あれど其は此邊を廣く埃と云し事考考らるるの故也。抑古書どもも可愛はと埃れど書るは元とて假字ふて江の意也。然るは此水引ありふ流る川を薩摩国内に大河ふて新

田宮とて西方三里許ふして海に入る満潮の時を川上五六里程潮の遡依地ふて信ふ江を云はる。其川向は郷に今も高江を云處あるれと戎合て。孰思は古海涯より上り方川傍五六里に地多。郡郷の名も非で。廣く江と云此山陵元とて川傍の地を埃之山陵と記し傳ふる也。同薩摩国穎娃郡穎娃郷に聞山に上り代山陵必此處あるを云傳ふる也。近頃可愛之を昔より全く瓊く杵尊の御陵とて傳む有る事は殊更に拠る筋も無く多。穎娃とてかくて此地に古記云名に就ての強説とぞ聞えとる。御陵と云傳ふるが三所あり。其一を新田宮とて西方一町餘ふして小高き山を依り今此を中陵と云。松杉其外

生より宮内村の内あり東に八幡山。西に端陵。南に南北に田地あり。其に接して半町許西方に當り。中陵と同形に山外む。其一つを有るは。此を端陵と云。此地も宮内村にて東に中陵。南西北に凡て田地あり。此の御墓に八幡山と連て遠目ふ。其尾崎の如く見ゆれど其處に到。今一は此二陵より十四五町隔てぬれど別離に離る。五臺村の内ふて谷間の如き處のや。打晴と云。田に中ふ。少く丸岡のある是れ也。此に川合陵と云。上なる二陵を。山に巔ある。御體を葬らむを所思き處に。小祠の建てるを。此處を依て昔是陵崩れ依時遷依由にて。今は二十間許隔て小祠を立と也。今社人の説に中陵に天照大神。端陵に忍穂耳尊。考幡千く姫命。川合陵に瓊杵尊。坐と云ふれど此はカアヒと云ふ小名の可愛の字音に似たるを以て生は

のしらある祝部ら此云出。ける此三に中ふ。一は瓊瓊杵尊の御陵とも云はれぬ。古に御々代々山陵の大和。因を依字併考る。何も圓ふ大なる岳とぞ聞えぬ。抑瓊瓊杵尊はしも大八島因知し看依。本に御祖と御坐は。其崩御する時を必天上と云。御弟に大御使あども有る。むとは牙。推量奉依、事れる。上も記依三陵の大和。因れる諸陵に競ては甚小を思ふ。此は俱に決て瓊瓊杵尊の御陵に非也。然に云。此三陵も尊き神等の御墓ある。事に疑あき物あり。其端陵と云。處往し文。化。二三年に事ありと云。松の太木に倒て根ある土を持。起る。如埋置しと。其時見と。已し人の語り。其真に御陵に。上も云依八幡山外

見え交御く世く此御紀ふも御位階外ど依し給事も
見え祢む舊を御社を無ししふや諸神記てふ書ふ新田
宮始不營廟殿云くせいひ吾國人の傳藏は古年代記ふ
陽成天皇元慶六年薩州新田宮建立等云はた覺東外き
説おのら然る傳説も有るはふや上代の御陵何も御社
此有し趣ふは非れむ古く御社此事の見えぬぞ中くふ
御陵あらむ徴とや云ふき皇帝記と云物よ伏見院正應三年庚寅薩州八幡新田宮於高麗橋有舞樂棧敷五十三軒見物人三万云くと有由物
高麗橋有舞樂棧敷五十三軒見物人三万云くと有由物
御繁昌よはて此御社最初を瓊瓊杵尊を齋祀也後よ八
幡大神を會祭るむ事は云まくも更なる我何此頃をり

の九州五所八幡宮を云號初めて此宮も其一也神祇拾遺
と云物了後栢原天皇の大永年中此五社を一つよ総て
山城国小山庄ふ祀給き今東京極之北五所八幡宮ある
其ありと見えこれ今八幡大神此方よ取てもやぶ
と無支列の御社よあむ有る○篤胤云山城の五所八
幡宮の事は雍州府志よ委く見えたり○玄道云五所と
ハ右神祇拾遺よ筑前大分宮肥前千栗宮肥後藤崎宮薩
摩新田宮大隅正八幡件五社皆外固あれハ参詣も便あ
ちとて後栢原院御宇大永七年山城小山庄よ遷ると見
え又山城名勝志よ坐京極鞍馬口北一説此社室町殿鎮
守也時人號御所八幡室町殿荒廢後被遷此地と云也此
宮の事案どもハ玄道別
よ委く記奉る物あり然るを大らうれる古此俗をし
て殊更よ記し留るは物も外く許多此御代を經る隨ふ
遂ふ紛はたれ説此出來て今此日向国内ふて其處よ何
也彼處よ在等云えりハ悉信られぬ説等あり固とり

神世に三御代に事跡の見えたるは總て今大隅薩摩の處に有る。其陵も必是の國方に在るに支理を承る。但當時の有趣まは高千穂峰に天降坐しとゆ。直に國境と云て笠沙御前に到坐し趣おれむ。同國内にあらざらば笠沙御前より八幡山までは直徑七八里も隔たれむ。少くも何れも云はれど何ぞ由有て此に葬奉る。或は此水引の邊甚しく打晴る。山川はありてははひれど總て甚麗く愛とたが上ふ。古く宮古と云地名も聞え。今も宮里と云村も有は。彼笠沙に御前ふ。大坐る。後ふ。移行幸して宮敷坐しふも有むの志を云ふ。是三陵志と云書をも大河平眞柱此人

后に後醍醐院家を嗣げ正と云人の近く文政元年頃み記る物と聞えたるは三陵と云む。必穂く手見命葺不合命の御陵をも考へらむ。予が見しは唯是一陵の考のみあるぞ。甚惜きや。但此説中にも己が心は宜しうらむ。思事少取らざ。篤胤今此説を按ふ。此は前ふ師に引ある説の有る上ふ。尚精考と云説ふて甚も愛とたが上ふ。就て己の思旨我も書加む。先可愛。又埃等書たるを假字よて。江此意あるが。其川傍五六里に地を郡郷の名ふも非ざる。廣く云はれ名を見たるは然る事なり。其は神代紀に素盞鳴尊下。到於安藝國可愛之川上也。とあるを。出雲國意宇能郡安來郷よて。既く上。第五段。よ見えしが如く。又神武天皇紀に。至安藝國居于埃宮と有處。今を三好川とも可

部川をも云。即安藝郡ふて。埃宮此舊趾も社あり。神武天皇
皇孫記。社邊の川を埃湊と云。同郡ふ可愛洲と云。も有
也。又廣島より西ふ。川合川と云。ゆめ。川合は可愛此字音
の訛ふて。是ぞ可愛之川をゆめも云也。○玄道云。花万
宮。安藝郡。在也。神武天皇御征伐の御時の皇居の所と
云。泰山集。よも。全郡有神武舊都。自一條至八條。以分配八
職。凡物八而備。此神世之法也。秋長夜話。よハ。或曰。是も
府中多家神社。その趾と云。さも有。はし。と記也。是も
大そ異なき。其川傍此地を埃と云。し例也。然れば薩摩
國ある埃も。同義ふて。共ふ江の意ある事。三陵志ふ論は
が如し。かくて。師此引き。ゆ三陵考ふは。謂は中陵を御
陵と爲とゆ。三陵志ふ。そを否と志て。直ふは。八幡山

字御陵と定とゆ。是も決て然るはし。其ハ己未其地を
見。巴し大御祖と坐。天皇命の御陵此分。明あら。天降坐
慨。堪。其。困人等の。我。物問人の。數。あ。ゆ。來。通。ふ。毎
ふ。探。お。其。地。の。あ。び。ま。ひ。茂。も。圖。さ。し。久。て。居。あ。け。て
の。ら。よ。も。三。陵。志。此。説。の。正。交。事。を。知。れ。ば。あ。り。け。て
其。三。陵。志。ふ。諸。神。記。て。ふ。書。ふ。新。田。宮。初。不。營。廟。殿。云。く。ぞ
ゆ。る。由。あ。れ。ど。其。を。甚。く。寫。誤。る。本。あ。り。然。ゆ。ハ。己。が。藏。と
ゆ。古。本。の。諸。神。記。八。幡。宮。此。五。社。別。宮。と。云。ゆ。條。ふ。新。田。宮。
者。雖。降。日。向。國。不。營。神。宮。遷。於。薩。摩。國。鎮。座。龜。山。と。見。え。又
宮。崎。宮。此。下。も。新。田。宮。御。神。體。同。于。宮。崎。宮。雖。降。日。向。國。
不。營。神。宮。鎮。座。薩。摩。國。龜。山。と。有。え。れ。也。又。同。書。の。諸。社。根
本。も。宮。崎。宮。の。下。も。薩。摩。國。新。田。宮。神。體。同。前。雖。降。日。向。國。
不。營。神。宮。鎮。座。薩。摩。國。と。出。て。五。所。別。宮。此。處。の。文。を。諸。神

記の文と一字も違ふ。又二十二社注式此異本小薩摩、因
新田宮神射同、于宮崎雖降日向、因不營神宮、鎮座薩摩、因
龜山と有也。○玄道云、諸社本懷も右も全文を載せ也。
又此宮縁起も天孫瓊杵尊最初降來之時、見塩土翁、
而構城壁雉堞起、高城千臺之處也。まゝ新田舊地名、
也。山者一而包龜形勢、因稱神龜山、西有山陵と云也。是諸
神記云書吉田卜部家、古説拾於。次く小記遺
る物と見ゆ、ゆが中ふも此新田宮此文は古傳の甚正き
説ふぞ有ける。其は此宮の神體多。宮崎宮小同と云ふは。
例の故實知、惣彼家説ふお有れ。其文も依て攷ゆ。雖
降日向、因云く。せ云語を宮崎宮小坐。八幡三柱神此御
事とては都小叶。新田宮は本と也。邇邇藝命もたは
し坐る故ふ。かゝゆ古説の有しお也。新田宮の迹く藝命
も坐ると云事、古き

物み見え、とる事あく。唯橘、三喜と云し人の一宮巡詣記
と云、物み延宝三年十月十二日、鹿兒島を出て、十三日ふ
千臺の新田八幡詣、此社ハ瓊杵尊あり、埃の陵あ
り。後み古木茂り、前ふ丸き小池あり、外ふ陵二、何也。皆石
を疊み、井垣して有り。山も多し。と記るが有れ。みりて
是、と古き物見え、右に三陵志れ、み見て、因人
の強説と、倫も有べきを、諸神記の文も依て、其説
の正、支事も知れ、る。○玄道云、地理纂考ふ、此御社の事
を委く考證して、新田ハ和名抄ふ、云、今水引、郷も隸、
正殿瓊杵尊、東殿天照大御神、西殿栲幡千々姫云、四
所神社奉祀、彦火、天孫降臨の時、陪從の五件緒、神及八百
姫命、廿四所神社、天孫降臨の時、陪從の五件緒、神及八百
萬神、の四所神社、天孫降臨の時、陪從の五件緒、神及八百
人等、訴状み、當社者、百歳之昔、忝有、五神、王、面、日向、因、天
降之時、前行、給云、武内、神、社、彦、太、忍、之、信、命、荒、神、社、素、盞
鳴命、以上、可愛、山の絶頂、あ、諸神記、云、按、る、ふ、當、社、ハ、始
可、愛、山、の、一、名、あり、俗、ふ、八幡山、と、も、云、按、る、ふ、當、社、ハ、始
此、山、の、半、腹、ふ、鎮、坐、有、し、を、承、安、三、年、炎、上、の、後、山、上、ふ、遷
坐、有、し、由、新、田、宮、文、書、も、詳、ふ、し、て、諸、神、記、と、符、合、せ、り、山
の高、六十間、餘、周、廻、一、里、餘、ふ、て、石、階、を、登、る、事、三、百、九、十

餘級あり古松老杉の間をり四方の遠山を望み近く川
内川を見放て勝景他も云又往古當社の壯大あり
藏女よ似たり故ふ龜山とも云嘉應二年二月廿二日
志由八皇帝記進み云又新田宮嘉應二年二月廿二日
書よ新田宮注進神輿唐鞍口志於手鹿皮切付鹿皮鏝鐵鞞
等の事と有て御唐鞍伍口志於手鹿皮切付鹿皮鏝鐵鞞
色華轡馬形鐵手綱腹帶圓絹璫珠義面云己上準千四
百卅六匹と見え永仁四年三月十四日文武書新田宮造
營損色事加勘定注進功程旨御殿一宇三間四面檜
皮葺云く回廊四十九間内組二間分云く都合六千四百
五十四貫七百七十文此錢今ふしてハ僅なれど當時の
途并船賃人食料番匠祿物等不存知分間御神宝遷宮用
大略注進如件建治元年六月修理職大工散位山上守弘
と見え又後醍醐天皇元亨四年五月神人等訴狀は當宮
日向天降高千穂觸之峰御事天下始也云く然者固
司每初任先遂奉幣於當宮令進當宮御神拜用途之後被
重執行罔務之條先例也とも有り是等を以て古の壯大嚴
雖更より造營の餘力無しを慶長年中島津義弘同家久

征韓の役も勝利の祈願成就の報應として宝殿拜殿舞
殿及回廊支社ふ至まで一宇も残ら古を摸し壯麗
を盡て再興せし抑當社ハ往古可愛山の半腹に鎮座有
しを承安三年炎上有て其後山上に遷坐有しなぬ新田
宮縁起も當宮者原在山半腹云く丁承安三年正殿以下
門廊等炎上乃營假殿于山頂且以可奉移山頂乎否事歴
奏聞則安元二年下被可之宣旨於是始新建正殿于山上
と有ども安元二年八月誤り其たり後亦正殿于山上
文書深草天皇建長八年四月神人執印惟宗友成等連署
よ請特且任先規且依傍例奏聞公家申賜官旨被造替當
宮正殿以下神殿門廊等子細狀抑先度造官旨被造替當
山麓之間任所々々例可奉移山頂否之由被奏聞之日可奉
造山頂之由被下占形畢去承安年中件正殿以下門廊等
不慮之外炎上之條相叶御占冥慮令然也悲哉祠官等瞻
遂其節之事斯神官庭弱而早聽不達故也而于今不
陵岳之嚴雖勤式日神事視殿之廢欲復往古之基跡云
云望請裁斷且任先規且依傍例不嫌罔中庄公郡郷平均
支配不日可被造替之由經奏聞賜宣旨早速被遂其節者
將増御神之威光彌仰敬神之皇化奉祈無疆之寶祚矣仍
為公為私不可不奏之故粗勒事狀言上如件又龜山天皇

文永五年正月神官等訴狀。承安三年件正殿以下門廊等不慮外炎上畢同四年急可造畢之由依被下日時勘文。適當宮根本造立之地為御山麓任所。例可奉移山上否。事經奏聞之日可奉造山頂之旨。安元二年之占形嚴重也。然而于今不遂其節。云伏見天皇永仁七年三月神人執印。惟宗重友等八人連署狀。欲早經御奏聞。被寄附料所於社家調進神輿以下御神寶等。被遂行遷宮。後可造畢未作寺等。由被仰下。子細事云々。爰承安回祿之。以後不日可造營之。由被仰下。或任者乍申領承。不終其功。空馳過一任。或任者申子細。不遂造營。固務非重代之間。自然禱緯起。自獻慮。重々被御沙汰。為固衙之沙汰。可被造營之。由可被仰下。之處。固司依被申子細。被寄附料所於社家之。間正殿朽損之上。適正殿武內以下數宇造營。猶未作。社不及遷宮。送而假殿之條。云神慮云。公平旁。以有其恐。任菅崎宮之。例先被遂。行御遷宮。於未辨。于時。藏人。大進。奉行。永仁二年十月廿四日。猶被相延。左少辨。于時。藏人。大進。奉行。永仁二年十月廿四日。仰下。之間。官使。下向。事。旅。糧。以下。社家。無力。雖。為。難。澁。事。申。

子細者。可被相貽。御不審之間。愁就申領。掌被下。宣旨。依被差遣。官使。因房等。云造營。并未作。分。云社家。收納。料所。奉貢。官使。等。注。進。之。仍。官。務。被。執。奏。之。間。未。作。寺。社。損。色。功。程。事。重。又。被。仰。官。使。召。至。要。所。勘。注。狀。畢。云々。と。有。て。此。後。新。田。宮。文。書。中。に。造。營。及。遷。宮。等。の。事。見。え。ざ。れ。ば。山。上。に。遷。座。有。し。ハ。永。仁。七。年。と。り。八。九。年。に。間。あ。り。む。承。安。三。年。炎。上。よ。り。永。仁。七。八。年。ま。で。ハ。百。三。十。餘。年。の。後。あ。れ。ば。其。間。遷。座。有。て。假。殿。に。御。坐。し。事。二。百。餘。年。或。ハ。三。百。年。を。歷。て。宮。殿。造。營。有。し。御。坐。し。事。二。百。餘。年。或。ハ。三。百。年。を。歷。古。老。傳。説。に。始。可。愛。山。よ。り。北。方。十。町。許。川。内。河。の。向。あ。る。隈。之。城。宮。里。村。高。頭。坐。有。し。由。云。正。隈。之。城。八。幡。宮。居。之。地。舊。記。に。宮。里。村。高。頭。坐。有。し。由。云。正。隈。之。城。八。幡。宮。居。之。敷。右。農。家。屋。敷。二。箇。所。ハ。往。古。宮。居。之。有。し。時。祭。具。其。外。諸。道。具。の。納。り。所。と。云。傳。へ。上。柵。屋。敷。十。五。日。上。柵。取。下。十。五。日。古。宮。居。の。頃。神。領。柵。取。兩。人。に。上。柵。屋。敷。十。五。日。上。柵。取。下。十。五。日。巴。又。上。古。柵。取。よ。り。新。田。宮。鎮。坐。有。し。其。時。ハ。今。權。執。印。と。云。し。と。先。祖。宮。里。村。に。住。し。て。神。事。を。主。巴。氏。を。も。宮。里。と。云。し。と。先。

日向ある高千穂峯ふ著して其をり薩摩の高千穂峯
ふ移幸と云事もを師考あるを猶己が考をも添て
第百三十八段の徴と傳とみ委く記るを見べし○玄道
云此を既く上第百三十八段の徴と傳とみ委く記るを見べし
み出論ふ此山を今ハ霧山をも霧島山とも云て西峯ハ大
説出て此山を今ハ霧山をも霧島山とも云て西峯ハ大
隅固贈於郡東峯を日向固諸縣郡由縁此山の不思議を
る事ども多く其中今も神代の由縁立事有と云く
稻の生ると申し又時今も神代の由縁立事有と云く
とて稻穂もて此を拂ふ事を記れし依て案ハ後ハ
のく先此山を天降於高千穂越組考と云物を記し事
るハ驚りされて余先高千穂越組考と云物を記し事
あり後ハ彼固人の地理纂考を見バ大うと云物を記し事
事記の文ハ錯乱有と云ハ甚信ある説をれと全趣を長け
れバ此ハ皇御孫命離天石座押分天八重雲降坐筑紫日向高
千穂峯下津磐根宮柱太尻立高天原千仝高知而坐也と
も有ふて益明白の正尚第百六十三段ハ纂考を引る條
考を合して此古説ふ笠狭ハ御碕ふ宮敷坐傳を漏れ

ぞ古事記神代紀ハ其趣見えふれ薩實ふも三陵志ハ云
如く後ハ高城郡ハ八幡山ハ域ハ宮所を遷賜るが其
傳二典ハ漏とは古風土記等ハ逸文ハ有けむ鎮座
龜山ハ云事ハ適ハ此諸神記ハ殘ハ依ハ此書ハ去ハれハ
賜物ハありハ上ハ此諸神記ハ其卷末ハ例ハのト家風ハ神祇長
の奥書ハも有と何人の記と云事ハ詳ハあらハ中ハ弘治二年ハ書ハ寫
説をも舉とれハ何人の記と云事ハ詳ハあらハ中ハ弘治二年ハ書ハ寫
云此家ハ人ハ杜ハ撰ハあハどハ思ハ寄ハべき事ハ非ハ右ハ此文等
目高城管領ハ之ハ眞古薩摩ハ之ハ固府ハ而ハ此ハ地ハ固ハ司ハ原ハ在水引郷境内
跡也地形高廣平坦斗絶今呼曰屋形原ハ在地頭館午方ハ
町許云ハ此地ハ元明其官舎之遺址又隣邑東郷有固司城ハ及
司野水引邑有元明其官舎之遺址又隣邑東郷有固司城ハ及
証也神龜山周廻雖一里余高低斷續非容廣厦千臺處也

由是觀之皇孫所居之正殿高城宮蓋又在此地再念其官以高城命之者蓋指高處万葉集曰見吉野之高城乃山尔白雲者行憚而棚引見是也故余釀生說曰當邑妹脊城一郭今猶有高城其地高廣可容厦屋數軒疑此地即皇孫所居欤と云る棄然れば邇邇藝命崩御して即其大坐はせ難き説あり

る宮北邊ふ御陵を造て葬奉るぐ謂依埃山龜山ふて後ふ其前ふ宮城造て新田宮と申依を復後ふ八幡神を別殿ふ副祀ゆ其とり志て八幡宮とも申し其山茂八幡山とも稱るなほべし和名抄よ薩摩国高城郡よ新多郷あり新田と云宮號必是よ起りむ
○玄道云全抄よ陸奥国新田郡迹比太と有て其他固くなる新座新治新居新野新屋おども皆尔比と訓也然るを上野国新田郡尔布太越中固新川郡も尔布加波と有ど万葉集十六卷よ乎尔比比多夜麻十八卷よ爾比可波と詠とれむ此も古くハ尔比を訓しあめ也世よ然る茂諸尔布ちふを古訓と思ハ人も有バ因ふのくあむ

陵式よ日向埃山陵を出と依日向を古記の儘よ載れし事論なく又廟陵記よ今薩摩国穎娃郡と云るは地名此相似あるを新田宮此事を知さ依故此誤あはる師又上此古説を思落れし故ふ頓よ廟陵記の言ふ依て高城郡と穎娃郡と接交は高城郡了在てふ説も信られ惣趣よ論まゝなり然れど此を猶考此麤の正しあゆけ也彼国の
るよ穎娃郡を南の端開聞岳のある域よて北牙次よ河邊郡次よ阿多郡を笠狭の御前ある域あり次よ日置郡次よ薩摩郡を大郡よて次よ高城郡れるが皆西の海邊よ漸田宮の地とり穎娃郡まで間よ五郡を挟みて直徑よ大凡二十里餘を有べし扱又此宮より東牙凡六七里放て大隅国曾於郡よ高千穂山あ也其事よ西北桑原郡よ穂く手見命の宮趾在也此事よ第百六十段の傳ふ云はし○玄道云地理纂考よ新田宮を往古

可愛山の半腹に鎮坐有て山上ハ御陵の遷れありけり後
更に惑事無正も出御陵の山上ハ御陵の遷れありけり後
さまたけ異説も出御陵の山上ハ御陵の遷れありけり後
る証を舉む日向新田宮藏宝治元年文書ハ玄道曰此ハ上
田宮所司神官等重解申云く薩摩國遷御之後者龜摩國新
峰奉一神御躰以明あらびされど葬或ハ藏崇の字ある事疑
絶頂よし御躰以明あらびされど葬或ハ藏崇の字ある事疑
べし又建長八年四月神人執印惟宗友成等七人連署
云く右謹檢舊貫天孫瓊杵尊圓寂砌可愛陵高城千臺
宮者今新田宮是也云く抑先度造宮之地可奉造山麓之間
任所例可奉移山頂否之由被奏聞之日可奉造山麓之間
由被上下占形畢而去承安年中然云云此御山麓之間
外炎上之條相叶御上冥慮令然云云此御山麓之間
御陵の事みて麓とハ始鎮坐然云云此御山麓之間
又文永五年神官等訴狀ハ天孫瓊杵尊圓寂砌可愛陵
陵高城千臺宮者今新田宮也云く承安三年正殿以下
門廊等不慮外炎上畢又同四年云く承安三年正殿以下
下日時勘文適當宮根本造宮之地為御山麓任所例可奉移

奉移山頂否事經奏聞之日可奉造山頂之旨安元二年之
占形嚴重也杵尊仁七年訴狀ハ無雙宗廟也高城千臺可愛陵
神三代瓊杵尊元亨四年五月文書ハ瓊杵宮ある事違あら
號新田宮云く又元亨四年五月文書ハ瓊杵宮ある事違あら
杵尊之崇廟也號是可愛陵云々是等の類舉る事違あら
疑はるる瓊杵尊の御陵ハ今の新田宮ある事違あら
文獻ハ神人等私説と云らるる古傳ハ瓊杵宮ある事違あら
此ハ神人等私説と云らるる古傳ハ瓊杵宮ある事違あら
れば弘最證と云べしと云らるる古傳ハ瓊杵宮ある事違あら
年元弘三年解文ハ無雙之宗廟と云弘建長八年及弘安六
社三代神為日域無雙之宗廟と云弘建長八年及弘安六
起于此神日本記曰此尊者立國之神聖創業之天祖也
も見ゆ此神日本記曰此尊者立國之神聖創業之天祖也
て僅二三日此文書等も明治十年慶島城の兵燹も失
み固柱曰嘗て京師吉田家甚惜事凡皇山陵有て又其
神靈を祭み嘗て京師吉田家甚惜事凡皇山陵有て又其
て山陵の上ハ必山陵の別處ハ絶て無事凡皇山陵有て又其
さて山陵の上ハ必山陵の別處ハ絶て無事凡皇山陵有て又其

山頂否と有る依り吉田家此説ハ信難くあむ誠や嘉永三年當社改造ふ就て宮殿拜殿其外諸所解毀ける宝殿の下ある中央の如くあるを聊掘見し大磐石數片を以て覆りど此所玉射を葬し處あるべし宝殿堅三間横五間許りて四方斜あり云む更おまど當社ハ往古朝廷も高くして御尊崇有て京も神靈を移給ひ筑紫五所八幡の中此一社坐正五所を訛て今御所と云八幡の記録も何れ八幡然云も古き世より此事も當社の瓊杵尊の皇居ありし由云正是は就て熟按るも始高千穂宮の御坐まして次は笠狭碕に遷給ひ彼所にて神去坐むハ御陵の在り所遠けきハ笠狭碕より又此所引の隣ありハ高城及宮里等の名も大宮ハ由有ハ宮里水引の隣あり高城及宮里等の名も大宮ハ由有ハ宮里あどや大宮あり高城及宮里等の名も大宮ハ由有ハ宮里ま高城郡新多と見え又新田宮神官執印某藏書ハ慶長十七年子六月薩州高城郡新田村名寄帳み川上左京亮とあり宝治元年十一月の文書ハ薩摩國遷御後云く

有も遷都の事と聞えとて説正又川合陵及中陵端陵あどの所在等をも委く記して是等ハ倍從の神々の墳墓あるべしとも説りさて上代の大宮ハ必一所に限るて二三も有らむと思はる考も有て下第百六十三段の傳よも畧云る如くあれハ今 ○故是佐久夜毘賣命者此を必しも遷都とも定難し

坐駿河國福慈岳淺間社也駿河國の事は志賀高穴穗宮の御卷ふ云ふし珠流河國造此條を見るべしけて福慈岳は即富士山

布久士と名抄郡郷部ハ富士浮志とあて諸書ふ又不盡布士不自富岷等尚色くハ書ゆハ福慈ハ省言ハ抑福慈と書ゆ字は常陸風土記ハ所見あるぐ此は富久士をも布久士とも讀むね不也其は既ハ出ふる氏ハ伊福部イホキタマハ五百木部をも稱ひ御吹玉字御富伎玉をも云を思ふ

此山名はもも富久士を曰し我布久士と云ひ。省て富
士を云と通れむ。前キは福は布此假字も用べ
る。思れど後キも熟思キばおは必ホクジを讀キべく書キる
あり。○玄道云。或人キも富ホ久ク士シ古事記キ意キ富ホ岐キ美ミ又キ意キ富ホ祁キ
命キ於キ富ホ美ミ夜キ又キ富ホ良キ富ホ良キ等キ皆キ保キ然キらキはキ富ホ久ク士シをキはキ何キ久ク
の假字キ用キられキとキりキとキ云キりキきキ然キらキはキ富ホ久ク士シハキ彼キ高キ千キ穗キ之キ久ク士シ
意キからキむキとキ云キふキ富ホはキ穗ホ久ク士シハキ彼キ高キ千キ穗キ之キ久ク士シ
布流峯キ久ク士シをキ同キくキ奇キれキ義キよキてキ此キ山キのキ卓キてキ高キくキ天キ進キ
てキ穗ホのキ如キくキ奇キ靈キふキ立キ多キるキ義キれキるキるキるキるキ其キ郡キ名キをキ富ホ士シをキ
云キむキ此キ山キにキ立キあキるキ故キのキ名キをキ依キべキしキ。下キ引キくキ都キ良キ香キ朝キ
老キ傳キ云キ山キ名キ富ホ士シ取キ郡キ名キ也キとキ有キむキ本キ末キをキ違キしキ説キありキ山キ
の形キ多キ伊キ勢キ物語キ今キ昔キ物語キ等キおキあキるキおキぢキりキのキ様キとキ云キふキをキ
伊キ勢キ物語キ塗キ筆キ本キよキむキ大キグキさキのキやキりキとキ云キひキ為キ家キ卿キ筆キ此キ
本キよキハキあキりキむキハキしキやキりキ此キ山キとキあキむキ云キふキるキとキてキ共キふキ常キ

の本キ外キるキあキるキはキ志キほキじキのキやキうキあキむキ有キるキはキ云キふキ
文キあキしキ天キ野キ信キ景キグキ説キふキ海キ濱キふキ遊キてキ塩キ竈キのキ煙キをキ見キしキふキ
海キ民キ鹽キをキ焼キふキ廬キ邊キふキ砂キをキ集キてキ堆キをキあキしキ畦キをキ見キしキふキ
來キてキ砂キ畦キをキひキとキりキ日キくキふキかキくキあキてキ山キ様キをキ作キりキ日キみキちキ
らキ去キのキ説キもキ有キむキ余キをキ此キ説キをキ然キるキるキるキるキおキぢキりキとキ云キふキ別キ了キ
人キのキ説キもキ有キむキ余キをキ此キ説キをキ然キるキるキるキるキおキぢキりキとキ云キふキ別キ了キ
北キ窓キ瑣キ談キふキ塩キ尻キのキ状キをキ説キふキ信キ景キ説キふキ大キのキとキ全キ趣キあキ
已キ又キ或キ説キふキ古キ今キ序キ注キみキもキ此キ説キ有キるキとキもキ又キ東キ大キ寺キ文キ庫キふキ
古キきキ塩キ尻キのキのキ傳キ有キるキとキもキ又キ近キ江キ圀キのキ三キ上キ山キをキ塩キ尻キ山キ
とキもキ云キふキ其キ山キ形キとキ比キ叡キ山キのキ大キきキをキ以キてキ富ホ士シをキ譬キとキるキ
ありキもキ云キふキ又キ筑キ波キ集キ下キ學キ集キ等キのキ意キふキてキ倭キ圀キ之キ物キ實キ又キ富ホ
もキ云キふキのキ代キあキらキむキとキもキ説キりキきキさキてキ取キ郡キ名キとキハキ袖キ中キ抄キ
物キ代キ等キのキ代キあキらキむキとキもキ説キりキきキさキてキ取キ郡キ名キとキハキ袖キ中キ抄キ
神キ社キ考キふキ引キるキ縁キ起キもキ同キ説キふキれキどキ皆キ彼キ記キのキ謬キをキ襲キしキあキ
めキ已キさキるキをキ釈キ常キ庵キ集キふキ駿キ州キ富ホ士シ之キ郷キ圀キ也キ置キ郡キ者キ七キ富ホ
士キ其キ一キ也キ蓋キ由キ山キ得キ名キ猶キ會キ稽キ山キ之キ在キ會キ稽キ郡キ金キ華キ山キ之キ在キ
金キ華キ郡キ耶キとキ云キふキハキ師キ括キてキ神キ世キにキ故キ事キふキ此キ山キ名キにキ聞キえキ
説キふキ符キてキいキをキ珍キとキしキ括キてキ神キ世キにキ故キ事キふキ此キ山キ名キにキ聞キえキ
あるキをキ常キ陸キ風キ土キ記キ筑キ波キ郡キ條キふキ古キ老キ曰キ昔キ神キ祖キ尊キ巡キ行キ諸キ

神之處到駿河、因福慈岳卒、遇日暮、請欲寓宿。此時福慈神
答曰：新粟初嘗、家内諱忌。今日之間、冀許不堪。於是神祖尊
恨、詈告曰：即汝親○玄道云、此句一字脫し、あらむ。何不欲宿、汝所居山生
涯之極、冬夏雪霜冷寒、重襲人民、不登飲食、勿奠者○神祖尊
美於夜能美古登、と訓、新粟初嘗ハ、和世能爾比、那倍志氏
と訓、家内諱忌ハ、夜奴知毛能、以美勢理と訓、べし、万葉十
四ノ誰ぞこの屋此戸れそぶる迹、布奈未、我グ夫多や
りて、祝ふお此戸を、を有る哥、ふて知るし、其餘の文を、全
き古訓も、て読難し、其意を得、更登筑波岳、亦請容止、此時
筑波神答曰：今夜雖新粟嘗、不敢不奉尊旨、爰設飲食、敬拜
祇承、於是神祖尊、歡然、誦曰：愛乎我胤、巍乎神宮、天地並齊、
日月共同、人民集賀、飲食富豐、代々無絶、日々彌榮、千秋萬

歳遊樂不窮者○此、新粟嘗ハ、爾比、那倍須、礼、杼毛、と訓、べし、
葛飾、已、せを、嘗、去、とも、其、か、あ、し、き、な、戸、あ、て、免、や、も、と
詠、る、を、思、合、て、知、る、し、右、二、首、此、意、又、新、嘗、去、る、時、お、物、忌
して、外、よ、お、人、の、來、る、事、を、も、忌、あ、り、し、事、等、第、四、十、
二段、新、嘗、の、所、お、師、説、を、舉、て、委、く、説、と、る、を、見、べ、し、
是以、
福慈岳常雪、不得登臨、其筑波岳、往集歌舞、飲喫、至于今、不
絶也、と、所、見、と、は、是、お、お、此、傳、お、神祖尊、と、有、た、大山津見、
神を、又、大山祇御祖、命、とも、申、は、其、お、る、は、く、福慈神、を、ハ、
佐久夜毘賣、命、お、ら、む、也、誰、も、そ、お、思、お、る、き、事、お、れ、ど、熟
熟、お、事、趣、を、按、お、ふ、是、祖、は、例、お、母、を、い、ふ、祖、お、て、女、神、と
聞、え、福慈神、は、お、男、神、の、如、思、お、は、然、れ、ど、此、は、大山祇神、佐
久夜毘賣、命、お、は、非、然、ハ、云、子、誰、神、等、お、ら、む、を、云、事、神、典

ふ思合^スはき神無^ナれば。此は佐久夜毘賣命の未^ズ此山^ノ鎮^シ坐^サげ^ル前^カと^シ。此地^ヲ宇^ラ斯^レ波^ハ伎^キ居^キ坐^セる神^ヲと^シ故^ニ。福^{ホク}慈^ジ神^ノと申^スし。神祖^ノ尊^トとは。山^ノ祇^ツ神^ノから^シと^モ。其母^ノ神^ノふぞ有^リら^ズむ。然^レれ^ド福慈^ノ神^ヲを^モ云^フも。宍^ノの^ノ名^ヲも^ト非^ズ。伊^ハ吹^キ山^ヲを筑^ク波^ノ神^トと云^フ。類^ハある^ガ多^クり^レ。其^ノ同^ノ類^トと知^ルべ^シ。○玄道^ノ云^フ。師^ハ説^ハか^レ。れ^ド六^ノ人^ノ部^ノ某^ノの^ノ猶^ノ神^ノ祖^ノ尊^トと^ハ。迹^ノく^ハ。藝^ノ命^ノの^ノ天^ノ降^シ坐^シて^ハ。後^ハ其^ノ大^ノ后^トと^共み^テ。天^ノ翔^ル於^テ。固^ニ巡^ル賜^ル。時^ノの^ノ事^ヲある^ベし^ト云^フ。又^ハ所^ノ歴^ル日^ノ記^ニ。淺^ノ間^ノ社^ヲふ。瓊^ノく^ハ。杵^ノ尊^トと^開耶^ノ姫^ノ命^ヲを^祀と^云。此^ノい^ト珍^キ傳^ノども^もて^ハ。余^も然^ル思^フ由^ハ。其^ノよ^ハ依^テて^ハ記^スる^物有^レど^ハ。處^セら^レむ^レ。此^ノふ^ハ載^ル。然^ル思^フ由^ハ。神^ノ名^ノ式^ノふ。富^ノ士^ノ郡^ノ淺^ノ間^ノ神^ノ社^ヲふ^ニ並^テ。富^ノ知^ノ神^ノ社^ヲを^載ら^レと^シ。依^テ社^ヲ。當^ノ固^ニ此^ノ神^ノ階^ノ記^ニ。正^ノ五^ノ位^ノ下^ノ此^ノ所^ノふ。福^ノ地^ノ天^ノ神^トと^記し。從^テ五^ノ位^ノ上^ノの^ノ所^ノふ^ハ。此^ノ社^今現^ルふ。大^ノ宮^ノ町^ヲふ在^テ。福^ノ地^ノ權^ノ現^ル福^ノ地^ノ祇^ト有^リ。

と云^フ。由^テふ依^テる^{。其}淺^ノ間^ノ大^ノ宮^ノ此^ノ神^ノ主^{。富}士^ノ氏^ノ此^ノ家^ノ外^ノる^古記^ニふ。地^ノ主^ノ福^ノ地^ノ明^ノ神^ト有^レ由^テふま^バば^ハ外^ニ也^{。但}し^カく^云ば^ハ慈^トと^シ疑^ハを^ハふ^人有^レら^ズれ^ド。タ^チツ^トと^サレ^ス。相^ノ通^ル音^ヲふ^{。甚}多^クり^{。を}も^思ふ^{。式}ふ^{。伊}勢^ノ固^ノ朝^ノ明^ノ郡^ヲふ^{。布}自^ノ神^ノ社^ヲ櫻^ト神^ノ社^ヲ相^ノ近^ク載^ラれ^テ。櫻^ノ神^ノ社^ヲ。今^も櫻^ノ村^ト云^フ。ふ^{。在}布^自神^ノ社^ヲ。大^ノ夫^ノ智^ノ村^ヲ云^フ。ふ^{。在}。今^も布^自權^ノ現^ルと^云。ふ^{。在}。布^自神^ノ社^ヲ。和^ノ名^ノ抄^ノ甲^ノ斐^ノ固^ノ都^ノ留^ノ郡^ヲふ^{。福}地^ノ郷^ノあり^{。富}士^ノふ^{。近}文^ノ邊^ヲ。今^も此^ノ要^ノと^ハ。あ^き事^ヲ。ま^{。志}貴^ノ瑞^ノ垣^ノ宮^ヲ。此^ノ御^ノ卷^ノ筑^ノ山^ノの^ノ事^ヲ。今^も此^ノ多^ク。あ^{。事}。ま^{。志}貴^ノ瑞^ノ垣^ノ宮^ヲ。此^ノ御^ノ卷^ノ筑^ノ山^ノの^ノ事^ヲ。今^も此^ノ固^ノ富^ノ士^ノ領^ノ上^ノ政^ノ所^ノ福^ノ地^ノ社^ヲ。奉^ノ寄^ノ神^ノ田^ノ江^ノ間^ノ四^ノ郎^ノ沙^ノ汰^ノ也^{。又}富^ノ知^ノの^ノ知^ヲを^式の^ノ古^ノ寫^ノ本^ノ。又^ハ大^ノ八^ノ洲^ノ記^ニ。引^ル。ふ^{。士}と^書れ^{。誤}寫^ヲ。あ^{。ら}む^{。の}主^ノ神^ノ。あ^{。ら}む^{。出}雲^ノ固^ノ意^ノ宇^ノ郡^ヲ。布^自奈^ノ大^ノ穴^ノ持^ト神^ノ社^ヲを^此山^ノの^ノ主^ノ神^ノ。あ^{。ら}む^{。け}て^古く^{。此}山^ノ此^ノ奇^ノ靈^ノ外^ノる^由と^思ふ^{。寄}と^る説^ハ。信^難し^{。け}て^古く^{。此}山^ノ此^ノ奇^ノ靈^ノ外^ノる^由を^稱と^はえ^{。万}葉^ノ三^ノ卷^ノ山^ノ部^ノ赤^ノ人^ノ望^ノ不^ノ盡^ノ山^ノ歌^ノふ^{。天}地^ノ此^ノ分

或人も云、如、鮮好之貝の義、ハ非じり、貝の生、鮮を賞
美る事ハ、高橋氏文、大足彦忍、代別、天皇、五十二年八月、
詔、群卿曰、云々、冬十月、到上總、固安房、浮島、宮、爾時、磐鹿六
葛、命、從、駕、仕、奉、矣、此、間、堅魚の事、あり、云々、船、過、潮、澗、渚、上
尔、居、奴、堀、出、止、爲、尔、得、八尺、白蛤、一貝、云々、爲、膾、及、煮、燒、雜
造、盛、天、云々、と、ある、を、書、紀、み、た、仍、得、白蛤、於、是、膳、臣、遠、祖
名、磐、鹿、六、雁、以、蒲、爲、手、繩、白蛤、爲、膾、而、進、之、故、美、六、雁、臣、之
功、而、賜、膳、大、伴、部、と、ある、も、專、と、蛤、膾、を、賞、美、給、へ、り、し、故
如、り、別、の、其、の、習、奉、る、を、も、有、ぬ、と、今、世、も、猶、水、貝、酢
貝、と、て、貝、の、鮮、きを、好、む、る、ハ、現、人、神、も、凡、人、も、古、今、の、人
性、異、あ、ら、ざる、を、以、て、の、く、ハ、思、よ、れ、る、を、**甲斐の国、打縁**
ゆ、さ、て、貝、を、峽、と、云、係、る、ハ、冠、辭、の、常、あ、り、**甲斐の国、打縁**
詠、あ、ら、む、と、見、え、雅、澄、ハ、大、神、景、井、谷、干、城、主、の、父、君、あ、り、
説、と、て、駿、河、と、見、え、此、國、ハ、大、河、有、て、甚、疾、水、音、此、四、方、も、動
ゆ、轟、く、よ、り、動、カ、河、國、と、須、留、河、國、と、訛、つ、る
み、や、と、思、ふ、れ、バ、此、も、打、動、カ、河、國、と、疊、統、け、し、あ、ら、む、と
云、**又、藤、河、の、義、の、と、云、れ、と、ヨ、ス、ル、を、ユ、ス、ル、と、云、し、例**
ハ、他、の、見、え、ぬ、バ、尚、ヨ、ス、ル、は、河、浪、の、打、依、と、云、を、縁、語、と
して、其、を、疊、懸、て、ス、ル、を、即、藤、河、此、ス、ル、み、云、寄、せ、て、駿、河

の、妻、る、ど、き、河、と、云、る、ハ、**駿河の国と、あちごちれ、国、の、三**
冠、ら、せ、と、る、み、ぞ、有、べ、き、**駿河の国と、あちごちれ、国、の、三**
中也、出、立、は、不、盡、の、高、嶺、ハ、○玄、道、云、或、物、ハ、此、歌、を、引、て、
とし、又、玉、葉、集、ハ、隆、辨、め、懸、て、い、く、り、み、成、ぬ、東、道、や、三
国、を、さ、の、み、ふ、じ、の、芝、山、と、有、を、初、夫、木、集、光、俊、朝、臣、の、歌
よ、お、ろ、高、支、の、ふ、ひ、去、は、の、中、み、出、て、四、方、よ、こ、え、と
る、山、ハ、布、士、の、根、又、よ、み、人、知、**布、士、の、山、ひ、を、お、あ、る、物**
と、思、し、み、か、ひ、み、も、有、て、み、駿、河、ハ、**天、雲、も、伊、去、は、**かり。****
も、あ、り、て、み、と、見、ゆ、と、も、云、ず、ゆ、**天、雲、も、伊、去、は、**かり。****
飛、鳥、も、翔、も、上、ぼ、燎、火、も、雪、も、て、減、落、雪、を、火、も、て、消、お、****
言、も、得、び、名、も、知、ふ、靈、く、も、座、神、り、も、長、歌、撰、格、ふ、今、本、た
ふ、と、く、も、た、く、は、山、の、も、と、云、句、を、脱、せ、**正、此、句、を、く、て、******
か、ら、あ、ひ、の、と、か、ま、バ、今、補、ひ、つ、と、論、る、は、如、何、あ、ら、む、石****
花、海、と、名、付、て、有、も、彼、山、此、堤、る、海、ぞ、不、盡、河、と、人、の、渡、も、****

其山の水此多ぎちぢ。日本此山跡。因の鎮をも座神りも。寶とも成る山のも。駿河ある。不盡此高峯ハ。見れど飽惚かも。畧解云。こちぢちち。彼方此方あり。三中ち真中あり。事外正山上。小峯あま。廻て。今此道一里許の湖あり。故。古くを形し。続後紀。興福寺此僧の長歌。日本此野馬臺。此因と詠ると。此歌とのみあり。此枕詞。みて。日のも。河。人の渡るも。其山此水。のそぎちぢ。をい詠れど。此河。案。富士をり。落る水。非。信濃のハ。嶽よ。正落ると。ぞ。玄道云。皇極天皇三年七月。條ふも。此河の事。見え。光。行海道記。と。世み。云。物。富士河を渡。惚。此河中。み。あ。そ。石。を流。音。み。聞。し。名。高。き。山。の。お。と。り。と。て。底。さ。へ。深。し。富。士。川。の。水。丙。辰。記。行。ふ。我。因。み。名。を。得。と。る。大。河。ハ。あ。ま。と。の。れ。と。殊。み。富。士。川。ハ。海。道。第。一。の。急。流。あ。り。あ。ど。云。駿。河。因。志。行。囊。抄。千。曲。真。砂。東。海。道。第。一。の。急。流。あ。り。あ。ど。云。駿。河。甲。斐。み。至。正。釜。あり。川。油。川。早。川。等。落。合。て。大。河。と。成。る。と。

云。甲斐因志。み。ハ。嶽。西。ハ。信濃。因。諏訪。郡。北。ハ。佐久。郡。あ。正。嶺。分。て。ハ。有。正。故。み。然。名。く。と。見。え。富。士。川。の。歌。ハ。躬。恒。集。み。逢。む。と。ハ。思。渡。ど。み。じ。川。の。終。み。去。ま。去。ハ。影。と。見。え。し。を。夫。木。集。み。清。原。深。養。父。峯。ハ。も。え。麓。ハ。氷。る。富。士。川。も。我。も。う。き。世。を。去。み。ぞ。煩。友。歌。ふ。不。盡。嶺。ふ。零。れ。く。一。み。き。る。み。と。有。を。始。甚。多。か。正。反。歌。ふ。不。盡。嶺。ふ。零。れ。く。と。読。正。雪。正。六。月。れ。も。ち。小。消。惚。ま。ば。其。夜。ぬ。り。々。正。希。士。此。嶺。を。高。み。恐。之。天。雲。も。伊。去。は。バ。加。正。田。菜。引。く。物。を。○玄道云。此。一。歌。ハ。高。橋。連。蟲。麻。呂。之。歌。集。中。出。焉。と。あ。正。さ。る。を。長。此。山。を。詠。歌。と。も。よ。彼。連。の。歌。と。思。人。も。有。ハ。心。得。惚。事。を。此。山。を。詠。る。歌。是。ら。を。り。古。死。を。有。事。形。し。然。れ。ど。天。地。の。分。し。時。也。神。は。傳。て。と。云。如。く。神。世。々。正。立。あ。惚。事。は。云。も。更。あ。正。和。漢。合。運。因。あ。ど。舊。文。年。代。記。の。類。又。林。道。春。の。神。社。考。み。引。富。士。縁。起。あ。ど。舊。文。年。代。記。の。類。又。林。道。春。の。神。社。考。み。出。と。云。或。を。考。靈。天。皇。の。五。年。み。近。江。因。了。水。海。湛。駿。河。因。了。富。士。涌。出。と。云。る。説。も。有。ど。舊。文。俗。説。み。て。取。み。足。ら。ま。

又漢文よ記せる物ふは。本朝文粹よ。都良香朝臣此富士
山記ふ。富士山者在駿河國峯如削成直聳屬天其高不可
測。歷覽史籍所記未有高於此山者也。其聳峯鬱起見在天
際。臨瞰海中觀其靈基所盤連互數千里間行旅之人經歷
數日乃過其下去之顧望猶在山下。蓋神仙之所遊萃也。承
和年中。從山峯落來珠玉。玉有小孔。是仙簾之貫珠也。此文
高不可測。と有と諸書よ。或は直み立れむ九十六町と云
或た二十五六町あり。おども云まど。窠ハ地平より二十
二町許の直徑あり。をぞ。○玄道云。新庄道雄の駿河新風
土記よ。仙簾之貫珠を。や否ハ知べらざれども。今も
山の南の麓富士郡の山野に堀出。物あり。其自管の如
く。ふて小孔あり。色青黄黒淡紅の物あり。自然の物。非
此話よ。茅野の中。みて堀出るもの。一所みて五六合程得

とる者有し。と云。事を聞り。と云。又師翁の玉手纏み引
賜ふ。更科日記よ。富士川と云。ハふじの山より落くる水
あり。其圀の人此出て語るや。一年ごろ物み罷り。りし
の甚暑あり。しかむ。此水は。つら。み。休。つ。見。れ。川。上
の。が。より。黄。ち。る。物。流。き。て。物。み。著。て。留。り。た。る。を。こ。れ。川。上
ほぐ。り。取。り。見。れ。バ。黄。ち。る。紙。に。丹。し。て。濃。美。く。書。ま
と。正。奇。く。て。み。れ。バ。來。年。あ。る。べ。き。事。も。か。き。あ。し。て。又。副。て。二
を。皆。書。て。此。圀。來。年。あ。る。べ。き。事。も。か。き。あ。し。て。又。副。て。二
人。を。取。り。し。と。正。奇。し。あ。さ。ま。し。を。思。て。取。り。舉。て。干。て。収。り。二
し。を。の。へ。る。年。此。司。召。み。此。文。み。書。れ。たり。し。一。も。違。ハ。び
此。圀。乃。守。も。在。し。儘。あ。る。を。三。月。の。中。み。取。り。く。あ。り。て。又。あ
に。替。ま。る。も。此。側。に。書。付。ら。れ。し。人。あ。り。か。く。る。事。あ。む。有
り。來。年。の。司。召。あ。ど。ハ。あ。せ。し。此。山。み。お。ぢ。あ。ぢ。く。此。神。く。集
り。て。行。ひ。給。な。り。け。と。見。と。ま。へ。し。め。づ。ら。か。あ。る。事。み
さ。み。ら。ふ。と。語。る。と。有。と。ま。へ。し。め。づ。ら。か。あ。る。事。み
六。月。中。旬。櫻。花。盛。也。此。深。林。中。不。時。有。音。樂。或。歌。舞。聲。樵。山
賤。數。度。聞。之。若。謬。拵。或。歌。間。近。磬。或。笛。聲。頻。聞。依。土。人。恐。會
於。此。林。中。不。高。聲。笑。は。と。元。文。頃。有。行。脚。僧。宿。藥。王。堂。夜。更
人。靜。而。子。丑。尅。許。聞。杉。風。音。怪。清。耳。內。院。也。幽。響。琵琶。音。也。
其餘音絶感不思流。感淚傍人熟睡。覺之欲共聞。若妙音恐

絶欽聞之半時許遂絶清音也。と有をも此も貞觀十七年。考合て神仙の遊萃所ある事を徴はべし。

十一月五日。吏民仍舊致祭。日加午。天甚美晴。仰觀山峯。有

白衣美女二人。雙舞山嶺。上去巔一尺餘。土人共見。古老傳

云。山名富士。取郡名也。山上有神名淺間大神。神社考も引

縁起も。孝安天皇九十二年六月。富士山涌出。初雲霞飛來。

如穀聚。無險阻。後頂上五磐石出。其落下。跡作溪壑。取郡名。

而曰富士山。形似合蓮華。絕頂八葉。層層到第八層。中央有

大窪窪底湛。玄道云。一滿字。あ。池。傍。玄道云。一。有。字。

色如青藍。味甘酸。治諸病。とあ。池。傍。玄道云。一。有。字。

あ。穴。形。似。初。月。穴。中。或。燃。玄道云。一。有。字。

黒烟。雨。土。砂。或。白。雲。金。光。映。徹。現。鬼。神。形。赤。黒。色。承。和。三。年。

季春。垂。珠。簾。雨。玉。四。方。貞。觀。五。年。秋。白。衣。神。女。出。現。雙。立。舞。

遊。時。火。炎。揚。有。圓。光。即。祭。之。號。火。御。子。云。く。と。も。見。え。夫。木。

集。よ。貞。觀。十。七。年。云。く。と。富。士。の。記。も。書。さ。る。故。も。思。出。ら

る。と。て。源。光。行。富。士。の。嶺。の。風。も。た。よ。ふ。白。雲。多。天。つ。引。

女の袖りとぞ見る。せも有。玄道云。詞林採要抄。引。

るも此縁起と聞ゆれど。稍異全あ。故一として注せ。巴

さて圓光云く。謂る九合ある。火御子と云。石の縁あり

と。或人も云。又皇美麻命の御事。と云。説も有。ハ上の常

陸風土記。條も擧。し説も。殊も。由有。と。く。察。べ。し。さ。て。道

雄の説も。貞觀十七年十一月朔庚辰。あ。れ。だ。五。日。ハ。甲。申

よ。て。今。も。初。申。神。事。と。て。淺。間。宮。の。神。祭。の。日。あ。り。昔。よ。り

此。日。を。祭。日。と。云。ふ。事。久。き。事。知。べ。し。又。友。人。神。田。定。保。の

記。も。寛。政。十。二。庚。申。年。六。月。駿。東。郡。下。和。田。村。の。民。幾。兵。衛

の。娘。二。人。富。士。山。上。よ。り。頃。十。七。八。の。美。女。二。人。立。居。と。る

を。見。て。同。村。の。義。兵。衛。と。云。者。も。告。て。三。人。同。く。是。を。見。と

り。と。云。話。を。須。走。村。の。素。山。此。山。高。極。雲。表。不。知。幾。丈。頂。上

有。平。地。廣。一。許。里。其。頂。中。央。窪。下。體。如。炊。甑。甑。底。有。神。池。池

中。有。大。石。石。體。驚。奇。宛。如。蹲。虎。亦。其。甑。中。常。有。氣。蒸。出。其。色

純。青。窺。其。甑。底。如。湯。沸。騰。也。玄。道。云。甑。と。和。名。抄。も。炊。飯。器

名。古。之。岐。和。良。乃。波。飛。と。あ。り。一。の。石。字。脱。し。を。袖。中。抄。和

歌。童。蒙。抄。詞。林。採。要。抄。も。取。て。補。つ。道。雄。説。も。昔。友。全。志。若

者と内院み入りし事有しふ十町許みて一面の焼砂み
て今ふ火有て炎堪のとし又二三町行火を飢し其より
十町許下み虎蹲とりと見ゆる石あり行て見まば小山
也其下み大川有と正く語を聞り虎石神池ハ此事みや
とも云_レ其在遠望者常見烟火示其頂上_ニ匝池生竹青紺柔煥
宿雪春夏不消_ニ此節_ニ下_ニ舉_ル富士山志の九合目及頂
甌と云_レ池と云_レ事_ニ今探_ル謂_ル也_ニ内院あり唯_レ是文中_ニ匝池
生_レ竹と云_レ事_ニ今探_ル謂_ル也_ニ内院あり唯_レ是文中_ニ匝池
○玄道云澤元愷の遊記_ニ相傳_ル初有_レ水而竹木蔭蔽_ス室永
焰發_レ之後水涸_レ今唯_レ寫_ル官而已_ニと云_レ東鏡建長三年二月五
日條_ニ當炎暑之節者召_ル寄富士山之雪所_ニ爲_レ備_ル珍物也_ニ山
彼是以_レ无_レ民庶之煩_ニ休_レ被_レ止_レ之善政隨_レ一_ニといふ事_ニ也_ニ山
腰以下_ニ生_レ小松_ニ腹以上_ニ無_レ復_レ生_レ木_ニ道雄說_レみ今_ニ金明水銀明
ああり_ニみ_ニ又_ニ小松_ニと_ニハ富士松をい_レひ_ニ五合_ニ以_レ白_レ沙_レ成_レ山_ニ
上_ニみ_ニハ石楠と云_レ木あるのみ也_ニあ_ニと委_レく說_レ也_ニ白_レ沙_レ成_レ山_ニ
其攀登者止_レ腹下_ニ不得_レ達_レ上_ニ以_レ白_レ砂_レ流_レ下_レ也_ニ相傳_レ昔有_レ役居

士得登其頂後攀登者皆點額於腹下有_ニ大泉_ニ出_レ腹下_ニ遂_レ成_レ
大河其流寒暑水旱無_レ有_レ盈_レ縮_ニ山東脚下_ニ有_レ小山_ニ土俗謂_レ之_ニ
新山本平地也_ニ此件_ニハ下_ニ引_レく富士山志の八合目と_ニ也_ニ
士とは彼役直_レ小角を云_レ居_ニ多_ニ異_ニ本_ニみ_ニ處_ニと_ニあ_レ也_ニ同_ニ義_ニあ_レ
を點_レ額_ニ於_レ腹_ニ下_ニと_ニ也_ニ漢籍_ニ三_ニ奏_ニ記_ニ等_ニみ_ニ見_レえ_レた_レる_ニ龍門_ニの事_ニ
中村の湖此流れて相摸_レの謂_ル也_ニ馬_ニ入_レ川_ニと_ニあ_レる_ニを_レ云_レ也_ニ
也猶_レ是_ニ外_ニみ_ニ御_レ紀_ニみ_ニ見_レえ_レと_ニ本_ニ栖_レ海_ニ刻_レ海_ニ灰_ニみ_ニ埋_レる_ニ殘_ニ
此小湖を始_レ其湖_ニく_ニれ_ニの_ニ水_ニ海_ニと_ニ云_レ也_ニ其麓_ニ尔_レこ_ニら_ニ有_レ也_ニ
さて山東脚下_ニ有_レ小山_ニ云_レく_ニ也_ニ中村_ニの_ニ湖_ニ此_ニ東_ニ南_ニみ_ニあ_レる_ニく_ニ詳_ニ
あら_レ也_ニ固_ニ固_ニみ_ニ依_レて_ニ攷_レゆ_ニも_ニ山_ニ中_ニ村_ニの_ニ湖_ニ此_ニ東_ニ南_ニみ_ニあ_レる_ニく_ニ詳_ニ
お坂と云_レ丘_ニあ_レど_ニを_レ云_レる_ニも_ニ有_レべ_レし_ニ○玄道云_レ役_ニ小_ニ角_ニと_ニ
靈異記_ニみ_ニ賀_レ茂_ニ役_ニ公_ニ氏_ニ今_ニ高_ニ賀_ニ茂_ニ朝_ニ臣_ニ者_ニ也_ニ大_ニ和_ニ固_ニ葛_ニ木_ニ上_ニ
郡茅原村人也_ニと_ニ伊_レ豆_ニの_ニ島_ニみ_ニ流_レさ_レれ_ニさ_レて_ニ畫_レ隨_レ皇_ニ命_ニ居_ニ
嶼而行_ニ夜_ニ往_レ駿_レ河_ニ富_ニ岷_ニ巖_ニ而_ニ修_レと_ニ記_レし_ニ其_ニ賀_ニ茂_ニ役_ニ公_ニあ_レる_ニ事_ニ
ハ扶桑畧記_ニ一_ニ代_ニ要_ニ記_ニ今_ニ昔_ニ物_ニ語_ニ袖_ニ中_ニ抄_ニ等_ニみ_ニ見_レえ_レて_ニ養_ニ
老三年七月紀_ニみ_ニ見_レえ_レた_レる_ニ賀_ニ茂_ニ役_ニ首_ニ石_ニ穗_ニ千_ニ羽_ニ三_ニ千_ニ石_ニ等_ニ

一百六十人賜賀茂役君姓と有氏と全姓あるをそぐ産
土神も坐はと御祖も御姓一言主大神を云く奉る
あど古き俗説の聞ゆるハ言立も云まてもあま甚しき
妄言ある事鈴屋大人も己く論れとるが如くもて玄道
も委く辨置る物あてさて甲斐名勝志大石村ある十二
嶽役行者堂條相傳小角此地よ初て富士に登山せ
るとおむ今み駿河国大宮の神官此地よ來て此里の庄
屋按内みて登山するハ其謂也と云又木野戸勝隆説
よ或物ふ大宮の社人等の此方とり上ハ其故非或村
山より登る村山の三坊ふ數通此古文書有て發心門の
山役錢を取て大宮の社人出ても免然ふ大宮司等
山の管領とる者山役錢を出ても免然ふ大宮司等
時此を閣て凡此山石室等湯粥を賣商人ハ大石
村須走村より登て大宮に證狀を出し山名主と云を立
て之を支配其山名主大石村多始て三人あり其石室
見廻の爲と號て此村ある名主ふ案内せさせて登る事
と成りせも云り又彼大泉と有を道雄た富士郡猪頭上
井出二村の邊あらむと云りされど勝隆ハ大宮ある湧
玉池みて彼池水の湧出る事夥く忽み大河と成て延曆
神田川と稱と云るならむとぞれおゆると云べき延曆

二十一年三月雲霧晦冥十日而後成山蓋神造也やあて
抑是山の荒とる事此紀も見えとゆえ光仁天皇紀天應
元年七月癸亥六の下ふ駿河国言富士山下雨灰灰之所
及木葉凋萎と有を初めて日本紀畧延曆十九年六月癸
酉の處ふ駿河国言自去三月十四日迄四月十八日富士
山巔自燒書則烟氣暗暝夜則火光照天其聲如雷灰下如
雨山下川水皆紅色也同二十一年正月乙丑の處ふ是日
敕駿河相摸国言駿河国富士山晝夜恒燎砂礫如霰者求
之卜筮占曰于疫宜令兩國加鎮謝云く五月甲戌此所ふ
廢相摸国足柄路○玄道云一開宮荷途以富士燒碎石塞

る。富士宮。詠て奉ける。平泰時。ちやぶる。神代の文
月。此。さ。え。ぬ。れ。バ。み。と。ら。し。川。も。濁。び。り。け。り。と。も。見。ゆ。
德天皇紀。仁壽三年。七月甲午。以駿河。因淺間。神。預於名
神。壬寅。特加。駿河。因淺間。大神。從三位。清和天皇紀。貞觀
元年。正月。廿七日。甲申。奉投。駿河。因。從三位。淺間。神。正三位。
外。ど。の。也。○玄道云。諸社。根元。記。み。富士。式。外。延喜。七。年。五
或。人。も。云。る。如。く。非。説。あり。因。内。神。名。帳。み。富士。郡。坐。正。一
位。淺間。大明。神。と。有。て。正。三。位。淺間。第一。御。子。明。神。を。云。よ
也。第。十。八。御。子。明。神。と。申。ま。て。を。從。三。位。全。第。三。御。子。明。神。
又。正。五。位。下。少。淺間。天神。と。云。を。も。記。り。必。其。御。子。孫。の。神。
等。み。坐。ら。む。を。御。名。其。祭。神。也。一。宮。記。諸。神。記。を。始。諸。書。ふ。
の。傳。ぬ。ぞ。惜。し。き。其。祭。神。也。一。宮。記。諸。神。記。を。始。諸。書。ふ。
木花開耶姫命。と云。る。は。實。然。る。説。也。○然。る。我。神。社。考。み
起。を。始。諸。書。ふ。昔。夫。婦。よ。て。鷹。を。愛。せ。り。翁。と。犬。を。飼。ひ。縁
と。有。ら。る。竹。此。節。中。より。奇。く。女。子。を。得。て。養。ふ。ゆ。み。甚。

美。麗。き。少。女。と。成。り。て。名。を。賀。久。夜。姫。と。云。此。女。子。後。富
士。淺間。神。と。あり。翁。と。愛。鷹。明。神。と。云。此。犬。飼。明。神。と
成。り。を。云。説。有。と。其。前。の。事。識。等。の。辨。と。説。等。有。り。
今。更。み。云。但。愛。鷹。を。今。た。あ。し。あ。か。と。云。て。富士。よ。東
南。の。方。駿。東。郡。に。在。る。山。名。あ。り。又。富士。郡。あ。る。富士。山。の
西。南。甲。斐。因。通。道。の。北。み。人。穴。村。を。云。有。て。謂。ゆ。る。富士。
此。人。穴。あり。此。中。み。も。淺間。祠。有。と。ぞ。是。穴。の。事。也。東。鏡。行
囊。抄。梅。花。无。盡。藏。人。穴。草。紙。を。始。數。の。書。み。見。え。て。世。み。普
く。知。る。事。あり。○玄道云。左。經。記。あり。後。一。條。院。天。皇。寛。仁
元。年。九。月。大。奉。幣。使。定。の。條。み。東。海。道。使。藤。原。季。忠。十
二。月。二。日。丁。卯。神。宝。支。配。事。云。々。驛。鈴。東。海。道。伊。勢。因。多。度。
社。尾。張。因。熱。田。駿。河。因。淺。間。州。伊。豆。因。三。島。下。總。因。香。取。常
陸。因。鹿。島。又。安。藝。因。伊。津。岐。島。社。み。傳。れ。る。神。主。佐。伯。景。弘
が。仁。安。三。年。十。一。月。解。み。駿。河。因。淺。間。社。守。藤。原。朝。臣。爲。保
募。重。任。功。造。進。神。殿。舍。屋。等。仁。安。三。年。五。月。と。云。宣。旨。見。え
地。藏。靈。驗。記。み。富士。の。御。岳。淺。間。大。○云。く。又。樓。閣。高。く
秀。て。朱。丹。霞。み。色。を。交。へ。棟。梁。を。か。み。聳。え。垂。木。尻。金。物
雲。み。輝。き。頭。密。の。道。場。軒。を。續。む。百。八。十。間。の。廻。廊。費。を。比。と
り。と。云。東。鏡。み。建。久。五。年。十。一。月。廿。七。日。乙。卯。近。因。の。事。を。記
因。分。寺。可。修。復。破。壞。之。旨。被。仰。下。と。も。云。又。人。穴。の。事。を。記

して古老云是淺間大。御在所往昔日降敢不得見其
所とも見也梅花无盡藏。浮島在富士西南足鷹山前富
士之南其傍有人穴細。其七既小注せは如く。伊勢の朝熊
江等を云るを謬る也。社を古も今も常小あけはの社と云を富士山の淺間を
も阿佐麻と云を朝熊は省語也。と前小云る人も有は
實小然は言と通もは。彼伊豆固小坐石長比賣命をも
淺間神と申せば。此を御兄弟二柱小わさる御稱と聞也
まばあ也。俗小ハ富士淺間と字音小稱ふを又彼伊豆
小八葉と云峯有あども同趣ある。又伊勢の朝熊山を
常小淺間山と云信濃固の淺間山外る神をも石長比賣
命とも木花開耶毘賣命とも云且其頂上小八葉と云も
有て恒小燒て在あどもを思合べし。○玄道云此師説及
上ある伊勢の淺熊山小天上より初て木華の天降坐り
と有あども依て熟案小常陸固ある豊香島宮と云也も

天上とり遷ある名あ也。と風土記小見え春日と云も仁
徳天皇御世小糞垣とある故事小由也と云姓氏録の古
説ハ有と夙く開化天皇此宮名あれ也師説の如く鹿
所の義みやとも聞え多賀大神又伊勢高宮も共小天上
外る宮名を遷せるみやとね。天小坐笠間の神とあ
る笠間と淺間と相似朝熊と朝倉とも似通て或人も説
如く朝熊を櫻小由も有ハ蓋天上の宮名を。けて彼朝熊
地上小も遷るにやとけ。予思ハいか。有む。けて彼朝熊
社小石長比賣命佐久夜毘賣命共小力合。坐はせば。
伊豆固ある彼雲見山社邊小佐久夜毘賣命も坐べく。福
慈山小石長比賣命も坐ぶき哉。雲見山哉石長比賣命也
し。福慈山を佐久夜毘賣命と次るは各々其山小主神と
坐故也所思と也。其小此外小も高皇產靈神社と申て神
○玄道云此精義を早く上第一段及第四十八段等小委

曲マの説賜キを見知チべし。さて伊豆、圀ウの事を志シし物モノ。
泊ウ木の地チみ。波津ナ木キ花ハ香カ命ノと云ク。神カミの坐イ由ヨ云ク。若シ正シ説セを
らバ佐サ久ク夜ヤ毘ヒ賣ウ神カミも有リむシのサて類ル聚ル圀ウ史シも貞チ觀カン
二年ニ五月ノ甲寅ケイイン駿河スエ圀ウ言フ富士フジ山上ノ五色ノ雲クモ見ルと云ク。事コトも見
也ヤ勝隆シヤウリウ説セみ。淺間センケン神カミ社ヤ式シキもハ一座ノと有リども社ヤ記キ及ツ社ヤ傳デン
も。圀ウ常ト立ツ尊ノ大山ノ祇命ニギハヤヒの相サマ殿ノ坐イせ云ク。此コノ社ヤハ世ヨ類ル
ふキ二階ニ造ルあるを上下ノ共ニハ三扉ノあるふテ。三座ノある事
ハ灼ヤクし。然シカれど圀ウ常ト立ツ尊ノとハ例ノの謬ウ説セもて。甲斐ケイ圀ウある事
一ノ宮ノ及ツ吉田キチダの社ヤも三座ノあるを其ノ一ノ座ノを迹ノく藝ノ命ノある事
と傳デンるぞ。正シ案ノもハ有リはシき其ノハ上ノ見ルえとスる師ノ説セをモ
攷キ合スべし。扱キ又マ清和セイワ天皇ノ紀キも貞觀チンカン六年ノ五月ノ廿五日ノ庚戌ケイシュ
と云ク。正シ案ノもハ有リはシき其ノハ上ノ見ルえとスる師ノ説セをモ
駿河スエ圀ウ言フ富士フジ郡ノ正シ三位ノ淺間センケン大神ノ大ニと作スり。山火ヤマカ其ノ勢ノ甚シ
熾シ燒ク山方ノ一ノ二許里ノ。光炎ノ高ク二十許丈ノ。有リ雷ノ地震ノ三度ノ。歷シ十
餘日ノ火猶モ不滅ス。焦巖ノ崩レ嶺ノ沙石ノ如雨ノ。煙雲ノ鬱シ蒸シ人不得ス近ク。大
山ノ西北ノ有リ本栖ノ水海ノ所燒ク巖石ノ流埋ル海中ノ遠ク三十許里ノ。廣ク三

四許里ノ。高ク二三許丈ノ。火焰ノ遂ニ屬ス甲斐ノ圀ウ塚ノ。印ノ本ノも大山ノ北ノ下ノ
一本ノ據ル。本栖ノの本ノ字ノ凡クて。七月十七日ノ辛丑ノ甲斐ノ圀ウ
木ノも謬ル。今ノ之ノを改メむ下ノ皆ノ同ク。言フ駿河スエ圀ウ富士フジ大山ノ忽ニ有リ暴火ノ燒ク碎ク南ノ巖ノ草木ノ焦熱ノ土鑠ク石ノ
流埋ル八代郡ノ本栖ノ并ニ剗ス兩水海ノ水熱ノ如湯ノ魚鼈ノ皆死ス。百姓ノ居ル
宅ノ與海ノ共埋ル或有シ宅無人ノ其數難記ス兩海ノ以東ノ亦有リ水海ノ名ノ
曰ク河口海ノ火焰ノ赴向ス河口海ノ本栖ノ剗ス等海ノ未燒埋ル之前ノ地大ク
震動ス雷電ノ暴雨ノ雲霧ノ晦冥ノ。一ノ作ス。山ノ野難辨ス然後ニ有リ此災異ノ
焉ノ。加クて同年ノ八月ノの處ノ也ノ。五日ノ己未ノ下ノ知チ甲斐ノ圀ウ司ノ云ク駿ノ
河ノ圀ウ富士フジ山火ノ彼ノ圀ウ言フ上ノ決ス之ノ著龜ノ云ク淺間センケン名神ノ祇宜祝ス
等ノ不レ勤ク齋敬ノ之ノ所致ス也ノ。仍シテ應ニ鎮謝ス之ノ狀ノ告ス。又シテ同七年ノ十二月ノ
知チ圀ウ訖ス宜ク亦奉幣ノ解謝ス焉ノと云ク。事コトも見ル也ノ。又シテ同七年ノ十二月ノ
此所ノ也ノ。九日ノ丙辰ノ敕ス甲斐ノ圀ウ八代郡ノ立ツ淺間センケン明神ノ祠ノ列ス於官ノ

社。即置祝禰宜。隨時致祭。先是彼国司言往年八代郡暴風大雨。雷電地震。雲霧杳冥。難辨山野。駿河国富士大山西峯。忽有熾火。燒碎巖谷。道雄云此富士郡の方の事と聞え万野原ある風穴也。其燒拔たる跡今人穴村ある人穴ラと云其狀爐よて銅鉄を熔て流しとる如く。五町も十町も一面よ成れる燒石也。一ハ一口ヒぞ云て鉄屑の如くよ成れる石也。今年八代郡擬大領。無位伴直眞貞託宣云。我淺間明神欲得此国齋祭頃年爲国吏。成凶咎爲百姓。○玄道云若ハ一字を脱せるり。病死。然未曾覺悟。仍成此恠。須早定神社。兼任祝禰宜。宜潔奉祭。眞貞之身。或伸可八尺。或屈可二尺。變體長短。吐件等詞。国司求之。卜筮所告。同於託宣。於是依明神願。以眞貞爲祝。同郡人伴秋吉爲

禰宜郡家以南。作建神宮。且令鎮謝。印本件等詞の下ハ国本。雖然異火之變。一よ表據。于今未止。遣使者檢察埋割海千許町。仰而見之。正中。最頂飾造社宮。垣有四隅。以丹青石立。其四面石。高一丈八尺許。廣三尺。厚一尺餘。立石之間。相去一尺。中有一重高閣。以石構營。彩色美麗。不可勝言。望請齋祭。兼預官社。從之。とあ也。印本。垣字恒。誤。厚を原。云。此御社ハ今都留郡河口村。立せ給をぞ。此ハ郡家以南。南と有。如く此地ハ郡の南。一宮ハ今郡の北。亦そも前年の爆火。富士山の麓の諸村ハ。燦砂も埋れ。於れど。此ハ川口湖の北崖。おれ。爆火の及。げ。喜式。ある。社を建し。あるべし。と。甲斐。叢記。云。此地ハ。延喜式。ある。河口。驛。よて。八代郡。藤の木。よ。越。る。山。を。御。坂。と。云。昔。ハ。八代郡。お。正。と。甲斐。名。勝。志。み。云。り。但。全。書。み。相。傳。大。同。年。中。坂。上。田。村。丸。建。立。也。と。有。ど。此。ハ。下。み。見。え。と。る。大。官。の。事。

を混とるあ也。又此社の早くよりのかく官社と
坐あぐら式外あるも心也の惣事あ也のし。 けて此紀
文ふ剗海と有を彼万葉三は長歌ふ石花海を云はと稱
の同を以て諸書ふ打混とる説のみ多く聞ゆれども
此を元とて別處あ也其は先万葉あるは石花海と名付
て有も彼山は堤ある海ぞと有ば富士山記ふ其頂中央
窪下體如炊甑甑底有神池云くを云は所よて謂ゆは八
葉内院字云事著しかくて万葉十四は駿河歌ふ佐奴
良久波多麻乃緒婆可里古布良久波布自能多可彌乃奈
流佐波能其登又其或本も麻可奈思美奴良久波思家良
久奈良久波伊豆能多可彌能奈流左波奈須與續古今集
よ後鳥羽

院けふ也立思ひも下や氷るらむふじの鳴澤音むせぶ
也新拾遺集も慈圓さみだるふしのある澤水越て音
や烟も立まがふらむ同權中納言公雅飛螢思ひ
をふじと鳴澤よりつる影こそもえバもゆらむを云は
鳴澤ハ。即謂ゆる石花海あ也。賀茂翁は説亦是ふ同じ。其
万葉考六卷右駿河の所ふじは鳴澤を嶺上よ廻今道
一里許の穴あ也昔ハ水あり火有て相あふかふも涌り
牙る音高かりしと云也延暦十二年又貞觀の比も甚
く焼て後火も上と云也水も湛ぬ事も無く烟も絶て其
後宝永も山の下半焼出とゆを注れ千陰も此説よ從
ひ且彼長歌此下石花海とて鳴澤の事あり山上小峯
あまよ廻て今道の一里許の湖あり故よ其山は於て
剗海と混とて注せるは然る事よ通れど御紀も謂ゆは
る池の事と砂鳴岨等早く和歌童蒙抄袖中抄も見え
也さてハ鳴砂鳴岨等早く和歌童蒙抄袖中抄も見え
石花海今云精進海西海鳴澤也今云大澤もて富士山
の西方あり其麓も鳴澤村あり共ふ頂上あり内院と
異あるべしと云也甲斐国志駿河新風土記も己く

く論じき又或説よ。或本歌ある。久波とある波を。一よ无
をよしと以。奈字を古不二字を草書よ。誤るあり。さて
伊豆能多可祢とハ。嚴之高峯よ。稜威又伊加志と云。よ
全語よ。て。嚴しく重文事をも。伊豆と云。ハ。富士の神山を
尊と。のくも云。るあり。抑御紀ふ謂也。依剡海は。文ふ。大山
と説む。い。の。有。む。西北有本栖水海と云。埋八代郡。本栖并剡。兩水海と有。む。
富士頂上と。り。西北ふ避れる。甲斐ハ八代郡ふ。本栖海を
相並る湖ハ名ふて。山上。形ら。惣事甚明。ハ。故。圖。よ。依
て。攷。ふ。頂上と。り。西北の麓。乃ハ八代郡ふ。本栖村を云。ら
有。て。湖。ハ。是。よ。少。く。北。よ。倚。て。精進村と。西湖村と。並
る。各々小湖。ハ。本栖村を。乃ハ関所ある地あり。西湖村の
村。字。上。芦。川。と。云。ふ。即。北。ハ。大。石。峠。よ。て。此。よ。も。関。所。あり。其
盡の乾角よ侍る水海也。ハ。雲御抄。ハ。布士の高ね。ハ。其神

ハ石花海と名づけて。西湖と。東は。即都留郡ふて。鳴澤
我圀を守神也。と有。む。西湖と。東は。即都留郡ふて。鳴澤
村あり。乃ハ西湖村ハ東よ當る。此。鳴澤ふ近く。大石。川口。淺
川。船津。小立。勝山。大嵐。長濱。おど云。ハ八村ふ包れて。上ハ本
栖。精進。西湖の三を合。ふ。依。と。す。も。大。ハ。る。湖。あり。是。御紀
よ。謂。も。る。河。口。海。ハ。る。を。し。其ハ本栖。剡。兩海の以東と有。
然れど。此。村々。ハ。西湖。鳴澤。おど。云。名。有。む。頂上。ハ。石。花
海。鳴澤。と。り。吹。出。と。る。砂。石。ハ。埋。と。る。故。を。も。て。甲。斐。圀
司。等。の。私。ハ。お。ど。多。依。名。を。聞。え。あり。其ハ駿河。圀。ハ。上。言
ふ。ハ。本。栖。を。云。水。海。と。云。て。剡。海。と。云。は。け。る。哉。甲。斐。圀。司
の言。上。了。始。て。剡。海。を。記。せ。依。を。以。て。も。知。る。し。是。よ。て。石
花。海。鳴。澤

の名は頂上を云ふ本にて麓に云ふ末あり理著明あり
る非や西湖を決て紀文の刻海ありを其東に河口海
有ふ對てはのあらま西湖と書と協あるべきを今を西
湖と云由ある故今を古に復てセノウを讀り凡て
此邊に富士北八海とて一に須土海人穴村にあり○玄
道云此ハ駿河國富士郡柏原の地とぞ二に山中海を
中関此旁にあり三に明見一に明日見とあり海を明見
ふあに四に川口海を西濱に○玄道云此ハ共進
甲斐國都留郡にあり五に西海を西濱に○玄道云此ハ共進
海は精進に在り七に本栖海を本栖に○玄道云此ハ共進
海を志比禮に在り七に本栖海を本栖に○玄道云此ハ共進
代郡に在りとぞ万葉抄に凡て不の麓にハ山を匣て八
の水海有と云ふ此にそが中と河の間に今精
進大と云ハ元道雄説ふ本栖海と西湖をの今精
北二里餘の所焼石に富土の方よ南北一町餘東西三
狀歴然と云又河口海に鶴島と云南北一町餘東西三
町餘に辨才天社あり凡て焼石の嵩みとるふて東方
よ木立村と云よ五町餘あり其里人語み此とるふて東方
とる年ハ海中の乱石現出て歩みて島に通ふと云社前

一板に貞觀七年涌出
とる島の由記せり
けて其甲斐國司此文に郡家以南

作建神宮と有る國司に當時顯ふ作と協宮を云仰而見
之正中取頂飾造社宮と有は彼剗海と名々し水海を千

町許埋とる其頂上ある所ふ猶神に御稜威もて其幽界
ぬる社宮を現して神威の嚴さはま示し給るれ也然れ

ば此は當時二月二月に間を存り後よは幽世に藏
給し事言も更あり此識を既に第百三十一段伊古奈比

注せるを思合せて悟はし○玄道云或物に今精進海の東
北方に飾造社宮給跡あり今俗龍宮浄土と呼所にて
巖間清水の湛とる所あり中間の岩上宮社の在し所
み今辨財天を祭ると記せり又彼神の造賜に宮
社ハ川口村あり淺間社の神體と崇て齋祭ると云ハ
甚き妄誕あり又或物に此を小室淺間の邊の事をせり

けて上ふ記を御紀全十二月條ふ。廿日丁卯令甲斐國
於山梨郡致祭淺間明神一同八代郡と有社は神名式ふ。
甲斐國八代郡ふ。淺間神社名神大とある社ふて其祭神を。
一宮記を始諸書ふ。木花開耶姫命を云、依の如し然依ふ。
此國此名勝志と云書ふ。後此總圀風土記。八代郡此殘缺
ふ。淺間神社活目入彦伊狹智天皇八年己亥正月始被一
被字祭之と有也。社傳とを引て風土記ふ載依神社を。今
此山宮ふ。木花開耶姫命相殿ふ。瓊瓊杵尊大山祇神を
祀祀。○玄道云富士本宮社記ふ。至孝靈天皇御宇嶺上忽
有歲至垂仁天皇御宇深哀愍萬民之憂窮三年八月祭此
大神於山足之地以鎮之。又景行天皇御宇東夷多侵邊境

悉叛屢略人民日本武尊奉命舉兵討之初至駿河國云々。
尊即拜富士大神鑽燧取火迎放之揮劍空拂猛風逆起還
焚賊徒云々故更降靈威祭之。今山宮神社是也。貞觀年
あるよて山宮の本宮ぞと云師說ハ弥明白の也。貞觀年
中ふ今此社地ふ遷奉也云。風土記の説を信られ信
ど。其を凡て此總圀風土記と云物全を信られぬ物ある
合。中よも神社此鎮座又其祭神おど云。説よも故案よ
よも社記ふ貞觀七年此ふ遷奉りと云。を混誤るからむ
三代実録ふ因て河口村の社の事あるを混誤るからむ
又全書ふ於山梨郡云くと有。御此一宮よて古昔ハ此
邊ハ山梨に隸き河口を八代に屬しな也。又か、れむ富
士山の暴火ふ就て河口を八代に屬しな也。又か、れむ富
時令地へ遷しあむ。歌移植る泊瀬の花の白木綿を武
田晴信の詣し時詠る歌移植る泊瀬の花の白木綿を武
けてぞ祈る神のまよ。を云りさるを甲斐國志ふ
山梨郡東青沼村ある淺間明神を此時祭れし社あり
り北へ廻る麓を大抵八代の地あ也と云。乍も猶八代郡

一宮村に坐を式内社として本州第一宮と記せり。何善
々むとく考ふべし。さて此に櫻を神木とせるハ殊に師
説に能符合ひ不盡嶽志に大宮をも稱櫻宮をも有ハ家小
や又式に山梨郡金櫻神社有も由有る事あるはさして又
東鏡に後嵯峨院天皇寛元四年三月卅日己未評定甲斐
國一宮權祝守村申依停止鷹狩人々對捍供稅鳥之由事
被經沙汰供祭事者被免許之由被仰山宮と云々ゆ遷
出攝津前司師貞朝臣と見えと也

有_レ神名_二淺間大神_一と有_レ大宮に社も非_レ元と也八代
山梨郡ある社を云ふも非_レは此を謂也依二合目_一在
て淺間本宮と云宮の事よて其を山宮をも云_レ聞え且
大宮吉田に兩社也新宮とも稱由_レは_レ也但新宮と
を山上の古宮よ對ておそ云_レ大宮ある社を既_レ仁壽
三年よ名神よ預給む恒_レ云_レ新宮の類よ非_レ然_レて彼名

勝志に山宮に棟札に永祿元年戊午仲冬吉日神主伴重
盛と有り又神主重盛まで五十八代とあり今に至_レて伴
氏代_レ祠職多司_レ鎮座をり今天明二年まで相_レ續_レる由
をも記せり貞觀七年_レ伴_レ真_レ貞_レの祝_レを_レ爲_レしと也天明二
年まで_レ九_レ百_レ十_レ八年ある也然_レれば其山宮と云_レ社_レ先_レ甚_レ古_レと有_レて其
と也後仁壽三年と也は前_レ先_レ大宮に社も遷_レ祀_レめ其
後貞觀七年_レ又河口村に遷_レ奉_レる物_レを_レ知_レる也其を共_レふ
山宮茂本宮とせ_レ依_レ事は云_レも更_レ也但大宮村の社を建
て_レる紀_レ年_レを_レ御_レ紀_レに_レ見_レえ_レ祓_レと_レ神_レ社_レ考_レ詳_レ節_レに_レ緣_レ起_レを_レ引_レて_レ平_レ城_レ帝_レ大_レ同_レ元_レ年_レ立_レ
此_レ社_レを_レ有_レを_レ上_レ引_レと_レる_レ光_レ仁_レ天_レ皇_レ紀_レの_レ天_レ應_レ元_レ年_レと_レ也始_レ
て延_レ曆_レ十_レ九_レ年_レ同_レ二_レ十_レ一_レ年_レあ_レど_レ富_レ士_レに_レ燒_レる_レ事_レを_レ駿_レ河_レ
國_レと_レり_レ言_レ上_レし_レら_レば_レ此_レ固_レに_レ大_レ同_レ元_レ年_レに_レ其_レ社_レを_レ立_レけ_レむ_レ事_レ
然_レも_レ有_レる_レ言_レ上_レし_レら_レば_レ此_レ固_レに_レ大_レ同_レ元_レ年_レに_レ其_レ社_レを_レ立_レけ_レむ_レ事_レ
上_レ田_レ村_レ麻_レ呂_レ奉_レ勅_レ征_レ東_レ夷_レ寄_レ誠_レ祈_レ請_レの_レ誤_レ也_レ此_レ大_レ神_レ既_レ定_レ東
國_レ至_レ歸_レ陣_レ之_レ後_レ始_レ經_レ營_レ之_レ以_レ莊_レ大_レ神_レ社_レは_レと_レ全_レ一_レ社_レ記_レも_レ桓
武_レ天_レ皇_レ御_レ宇_レ延_レ曆_レ年_レ中_レ坂_レ上_レ田_レ村_レ麻_レ呂_レ奉_レ勅_レ自_レ山_レ宮_レ遷_レ御_レ于

茲號大宮淺間今之鎮座是也本福地神社也と見え勝隆
説ふ此山宮の舊跡ハ本社より五十町許北方富士郡山
宮村の字宮内と云ふ在て今も山宮神と云て本社
社ハ坐りされど古よりの習とて榊木を神體と崇て本
殿ハ無く拜殿のみありとも社傳ハ大同年間今此地
ハ遷奉りとも舊記ハ云く有ハ此御遷宮の事あるべ
しとも云りきさて甲斐名勝志ハ河口社ある東北此山
ハ大山祇命社有て山宮と稱せ見え甲斐叢記ハ其社記
ハ垂仁天皇御代ハ神山の麓ハ記らゆとある處ハ今山
宮と稱て本社ハ二十町ハ在ともあるハ共ハ別社あり
又園花万葉記ハ大同元年ハ山上社
を建と云ハ件説を混つるあり
さて貞觀七年此大
燒有し後延喜以前までハ煙立しを覚えて伊勢家集ハ
入志まじ思ふゆゑハ富士の祓は我グおぞやかく。一ハ
かと絶え燃らむむてハ身ハ富士ハ山をも成ぬるの燃
あハ絶え燃らむむてハ身ハ富士ハ山をも成ぬるの燃
るハぐたの煙あえぬむハと詠み古今集ハ序ハも富士

ハ煙ふとそ子て人をあひ。○玄道云全集ハ人知て思を
そわのめぢらしげハ又君と云ハみおれ見ておれ富士ハ
ぬのめぢらしげハ又君と云ハみおれ見ておれ富士ハ
思ハもえハをえハ神どよハけハとぬハむハハ煙ハ能宣集ハ章
深ハまどきハけハとぬハむハハ煙ハ能宣集ハ章
けハ重之集ハ燒ハ人も有ハじハと思ハ富士ハ山ハ雪ハ中ハ
煙ハあそとて拾遺集ハ千早ハふる神ハも思ハハ有ハハあそ
てハふハじハの山ハも燃ハらハ絶ハ大和物語ハ左大臣ハふハ
ぬ思ハも有ハ物ハをくハゆるハつハらハ心ハありハけハハ
多く竹取物語ハの末條ハも其煙ハ未雲ハの中ハへ立ハ登ハ
傳ハと記ハせるハをハも思ハべハさハて或ハ人ハ此ハ物ハ語ハ
御事ハとリ思ハ寄ハむハとモイハハと書ハつハまど下ハ文ハ
ハ富士ハの山ハも煙立ハハハハを有ハを思ハハ是頃既ハ煙絶ハ
ハ然ハふハ日本紀略ハ朱雀院天皇承平七年ハ此所ハ十一
月某日甲斐園言駿河園富士山神火埋水海と云事有ハ

是とて復煙立け也。

○玄道云。道雄説ふ。此時埋しハ下吉田村の上方富士の山腹ふ胎内と

称、大穴有て、其邊より押出たる焼石夥く、下吉田と舟津村の間を一面の焼石舂る所有也。舟津と川口まで一里此舟渡有所あるが、此より東に此海、口有しを埋たる故に水の落方ぬし。地中よ伏流して、相摸、国馬入川の水源、山中海と出る桂川に涌出と云、又山中海、明日見海も、元川口と一ありしを埋みてのく三と成し者あらむと、委く説也。外記日記に、一條天皇長保元年三月七日、駿河、国言上せる解文を載て、日者不字、御山焼、由何、崇者、即ト申云、若、恠所、有、兵革、疾疫、事、欬者、とあり、此、治安元年よ也。二十三年許、前の事あり、又紀畧、後一條天皇長保元年六月、富士山火、起、自、峰、一、嶺、とあり、至、山、脚、又、扶桑、略記、永保三年、二月、廿八日、癸卯、條、有、其、更科、日記、ふ、其、山富士山燃、恠、焉、とも見也、考、合、べし。

の状いと世よ見えぬ状あり。状異なる山の姿は、紺青をぬるとる様あるよ。雪の消滅世もなく積るとれば、色濃

絹ふ白きあめ衣とらむやうに見えて、山の嶺は、少平

とるとゆ。煙を立上る。夕暮ハ火の燃立も見也。を云はふ

て知るし。更科、日記に、菅原、考標、朝臣、女の記にて、治安元年、父、朝臣、み、從、て、上、總、国、と、京、み、上、れ、し、時、の

道、記、然るを十六夜、日記ふ。富士の山、残見まば、煙も立交

昔、父は朝臣お誘れて、いのよ鳴海の浦おれむ。おと詠ふ

頃、遠江の国までハ見しのは、富士は煙は末も、朝夕あし

のふ見えし物を、いおの年とてり絶し。を問は、ちどかふ

答、人ごおれし。誰が方よ靡果ての富士は根の煙は末

此見えに成らむ。古今は序の詞まで、思出きて、朽果も名

柄の橋を造ばや。富士は煙も立びおめなば、を云也。然れ

む此頃復タ既タ小絶ユとほれレ也。此日記云藤原為家卿の後妻
事有て建治三年十月此頃又父鎌倉子下は、時のを弘安
三年事記れとる物あり。又父朝臣云くと、續古今集
思事侍比父平度繁朝臣の遠江国罷けるも心あら
る伴て鳴海の浦を過とて詠侍けるさても我いのみ
みみの浦おれバ思方ハ遠ざのらむ轉寢記おも此
歌見えて後此親と頼る人遠江と上たるか子さよ誘
れて下し由見えて父とハ平度繁朝臣も此尼の後親
ありと或人説レべき。○玄道云轉寢記も富士の山ハ惟
こもとみぞ見ゆる雪甚白くて心細し風靡く烟の末
もゆめの前お哀おれど、子無き物ハと思ふつ心此
けぞ物悲の正レけると有ハ本文も能符れど十六夜日記
よ為守主と正レ立別れ富士此烟を見ても尚心ほそさの
いのよそひけむとある返しかりそえみ立別れても子
を思ふたもひを富士の烟とぞ見しと有ハいのみと云
ふ京よて知れ詠ふ詠ふ和られしみて共ハいのみと云
むぬり又海道記ハ誰人の作ふやえ知ぬど大り今比
の物あるべき多富士の高根ふ烟を望む臘雪宿して雲
獨むにび云くと問きつる富士の煙ハ空み消て雲み

あご正の面陰ぞ立於と云歌も見ゆさて源頼朝卿が富
士野狩れ古圖もも烟の立状を画け正と或人も説ひ平
家物語曾我物語も富士の烟の事を記し新古今集も
も西行が風靡く富士の烟の空消て行方も知ぬ我
心の外頼朝卿の道安のら富士此烟もわかぢべき晴る
まもれぬ空のきしきよと有を見ても其比ま燃し事
知るめり詞林採要抄お俗傳み昔ハ此山も燃る事甚
くして火焔天お上り黒煙日を隠し磐石を降し熱湯を
あぐし隣国鳴動して草木枯渴東作西収民の愁有ける
昔の焼石此山の四方の麓み數十里及て立べと云り其
在之云時知ぬ富士の煙も秋の夜此月の為みや立べお
りけむと記せる是と正後此物よてハ宗良親王の李花
集よ浮島が原を通て車返と云し所と正甲斐国お入て
信濃子心げし侍しふ然れのら富士此麓を行廻侍り
一よ二志うば山此姿いお方と正も同様見えて誠よ
字おし

類ちし。北ふれし。南ふおして。今日いこの。富士北麓を廻
き惚らむ。新葉集ふハ行信濃国ふ行かぎ惚れバ送れ者
歸し侍し次ふ。駿河あどし人れ許す。申遣侍し。富士の祓
の煙を見ても。君と牙と。淺間北嶽を。いか、燃ゆと。ぞ有
也。お新葉集をも校合て。今の要有事此みを抄出せる
あ。○玄道云。李花集ふ。又駿河国貞長の許ふ。興良親
王在由。聞て。暫立寄侍し。ふ。富士乃煙も。やどの。あけけ
立。あら。ぬ。心ちして。家おめづらし。げ。あき。や。う。あ。れ。ど。都
の人。を。い。か。み。見。え。や。し。あ。ま。し。と。先。思。出。ら。る。ま。は。山。の
姿。あ。ど。あ。み。か。き。て。為。家。御。の。許。へ。遣。と。さ。み。せ。や。な。語。
む。更。ふ。言。の。を。も。及。ぬ。ふ。じ。此。高。祓。成。り。也。と。も。見。也。さ。て
此。ハ。大。か。と。興。固。と。り。正。平。初。の。比。ふ。あ。む。有。は。き。を。宗。久
が。觀。應。即。正。平。五。六。年。の。比。ふ。東。国。ふ。遊。し。都。の。は。む。と。云。
物。ふ。富。士。の。山。を。見。渡。せ。ば。甚。深。く。霞。あ。め。て。時。知。ぬ。山。と
も。更。ふ。見。え。姿。と。て。富。士。の。祓。の。煙。の。末。ハ。絶。み。し。を。ふ。り
ける。雪。や。消。せ。ざ。る。ら。む。と。有。を。見。れ。バ。燃。も。し。或。ハ。絶。も

あ。と。る。み。や。又。元。弘。元。年。七。月。七。日。大。地。震。ふ。此。御。歌。ふ。據
此。山。數。百。丈。崩。し。事。太。平。記。南。朝。記。等。ふ。載。也。此。御。歌。ふ。據
む。興。固。れ。頃。又。煙。れ。立。る。也。し。事。と。は。い。し。是。よ。也。後。の。事。は。
博。も。攷。ま。か。く。て。近。世。れ。大。じ。き。荒。び。也。寶。永。四。年。と。云。年
れ。神。火。ふ。ぞ。有。り。也。此。事。種。々。此。書。み。記。せ。る。中。ふ。寺。島。良
安。が。書。ふ。寶。永。四。年。十。一。月。二。十。三。日。
夜。地。震。二。度。鳴。動。不。止。己。刻。富。士。山。燒。炎。高。煙。聳。焦。土。降。數
十。里。南。至。岡。部。良。栗。橋。翌。日。稍。止。又。自。二。十。五。六。兩。日。大。燒
巖。石。碎。飛。土。砂。焦。散。灰。埋。原。及。吉。原。之。地。高。五。六。尺。至。江。戸
之。地。高。五。六。寸。而。所。燒。出。為。大。空。穴。其。旁。贅。生。小。山。呼。稱。寶
永。山。と。云。る。也。簡。み。して。精。き。説。ふ。也。又。和。訓。栞。ふ。漢。籍。清
異。録。ふ。博。山。香。爐。峯。尖。上。有。一。暗。竅。出。煙。則。聚。而。且。直。篆。一
穗。凌。空。窈。美。觀。視。親。朋。儼。之。呼。不。二。山。と。有。を。引。て。世。ふ。云。
富。士。香。爐。あり。本。草。龍。條。ふ。頭。上。有。博。山。と。云。る。也。贅。あり。
と。云。る。も。然。る。事。あり。○玄。道。云。不。盡。嶽。志。ふ。承。平。長。元。永
保。の。火。の。事。を。も。云。元。弘。紀。元。七。月。岳。崩。數。百。丈。後。三。百。七
十。餘。年。有。寶。永。之。災。と。記。せ。也。又。冬。讀。書。餘。ふ。も。博。山。蓋。富
士。之。轉。音。峯。尖。出。煙。即。是。富。士。之。事。不。二。之。名。亦。自。我。傳。之。

をも説^レ正^レさて大扶桑^ノ國考^ム記^ス賜^ル如^ク龍宮^ノ船と云^フ物
よ彼^ノ寶永^ノ度燒^ケ出^シ前夜^ニ此^ノ寺^ノ富士^ノの裾野^ニ御廚^ニ淨光^ノ寺
と云^フる小寺^一宇^{あり}此^ノ寺^ノの門前^ニを夜半^ニ比^シ數百人^ノ計^ノ通
る如^クき足音^しける故^ニ住僧^ノ怪^ク思^ヒ垣^ノの隙^ニより覗^キ見^ル
ゆ^キ富士^ノ山上^ニをり數^ニ萬^ノ此^ノ獸^ノ甲斐^ノの方^ニへ走り^テ往^ル事^ノ夥^シ
月の光^ヲ能^ク見^レれ^バ常^ニ見^ル馴^ル獸^ノ數^多有^リ正^レ一時^計通^ケ
るの^ノま^だら^らふ^{あり}て皆^ニ出^盡と^リと思^ヒ比^シ長^一丈^程も有^リ
む^と見^ル物^ノの熊^ノ似^テ背^ニ二^ツの角^{あり}正^レ惣^ニ身^ノ眼^有
て其^ノ光鏡^ノの如^クき物^ノの人の様^ニふ立^テ手^を廣^ゲて通^ケ怪^シ
き事^ノと思^ヒし^ム明日^ニをり不^レ二^山燒^ケ出^テと^リ後^ニ所^ノの古^き
人^ノ聞^ク彼^ノ獸^ハ當^ル山^ニ此^ノ主^トけ^テ此^ノ山^ニ今^ノの委^ニ死^有狀^ハ
と昔^ニ聞^ク云^フ傳^トも記^セ正^レけ^テ此^ノ山^ニ今^ノの委^ニ死^有狀^ハ
富士^ノ山内^ニ記^ス云^フ書^ク富士^ノ山^ハ甲斐^ノ國^{都留}郡^ノ西南^ノ曠
野^ニ中^ニふ兀^立孤^絶比^シ山^ニ北^ニ東^北を都留^郡西南^ニハ駿河^國
駿東^郡富士^郡あり^正山^ノ足^ノの曠野^ニ甲斐^{駿河}を合^セて周^回三
十八^九里^許ゆる^レ比^シ武^田勝^頼の願^書三^州に跨^ルと書^ク
とれ^ど甲斐^{駿河}此外^ニ跨^ル國^{あり}

し衆^皆駿河^を四分^の三^{甲斐}を有^リと云^フ駿河^を
三分^の二^{甲斐}ハ其^一字^有於^テ是^ニ定^ム説^{あり}○玄道^云釈^常
庵^集富士^之為^山也^其高^逾一^由旬^而横^跨豆^駿相^三州^と
と云^フ物^茂御^が峽^中記^行載^籍以^來以^山隸^駿州^者蓋^取
諸^海東^瞻仰^之有^在也^其實^則山^之在^本州^者六^之三^駿為^二
豆^爲一^古人^鹵莽^之甚^可以^痛恨^耳と云^レれ^ど豆^爲一^と
を^茂御^も鹵^莽を免^レび^或ハ跨^于四^國を記^スる^等ハ更^ニ論^ム
よ^も足^らば^又二^國のみ^に跨^テ相^摸ふ^のら^ばと^モ甲斐^と
國^志裏^見寒^話も^説國^志も^七分^を甲斐^ノ山^也とい^ハ
へ^り地^藏靈^驗記^も駿河^{富士}の御^岳を拜^シ給^ふ三^國无^霜
霜^を副^麓ハ羣^峰重^疊せ^り春^ノ日^おら^も錦^を暴^テ星^ハ
ハ綠^野に連^レ日^ハ海^底を^出給^ふれば^巍々^と見^ル
と^る勢^蕩々^とる^粧喻^るふ^物なし^とも見^ル也^毎年^六月^朔
朔^日茂^山開^キとし^七月^廿七^日字^山仕^舞と^比都留^郡と^正
登^ル路^を北^口を^云駿河^を正^レ登^ル路^を南^口を^云又^北口^茂吉
田^口と^云南^口を^須走^口村^山口^大宮^口と^云篤^胤云^{駿河}
人^某云^須走^人

口村山口大宮口とも南と云ふ云ふ違ふ須走を東大宮
を西みて南と云ふ村山口此みあり然れど末至
て吉田口を須走口と合村山口と大宮口を合て吉田口
と村山口とは合ざるあれ都ての事甚委く記せるよか
のる違有た後み文字寫脱せる故ふ誤あるを登と云
り○玄道云勝隆が説ふ大宮町より村山を經て登を
表口と稱同因駿東郡須山村より登を南口と稱同因
郡須走村より登を東口と稱甲斐因郡留郡福地即吉田
村をり登を北口と稱麓みてハかく四口あれども頂上
よて三口あり其ハ表口ハ頂上淺間神社の前も出南
行合よて一みあり頂上久須志神社の前も出と云各
各村名を以て呼ぶ也須走村山の二口を駿東郡大宮口
説ふ富士山隸駿州凡關東八州望之山形不異唯北面山
脚長南面殊峻岨也吉田口大宮口蹠走口其三處各有淺
間神社坊舎神職有之皆謂之新宮と云井蛙抄雜談部の
歌よ富士の山同姿よ見ゆるの如あふる面もあゆと
純と有をも思ふし須走とり類れ下る砂一夜の間よ復
上と云事書等も見え世人も云事あり又是須走口よ

も淺間宮あて然れど官社もて非也○玄道云山槐記治
承三年正月十二日條よ明日入道大相因雖可參駿河富
士延引了と云事も有也さて漢籍義楚六帖も此山を
亦名蓬萊其山嶮三面是海一朵上聳頂有人煙日中上有
諸寶流下夜即却上常聞音樂と記し詞林採要抄藻塩草
及近くハ笈埃隨筆駿河因志も砂の上する事見也
須走口を山上八合目よ至て吉田を合し村山口を大宮
口を合し故ふ山上よは南北二口此みなり南を表とし
北を裏と次れども昔とて北口を登る者多し富士郡淺
司も例祭ふた北口を登る例とあるあり○玄道云甲斐
叢記も此北口を日本武尊の巡幸此時よ大塚とて遙
拜し賜ふ由引証せる事下條よ出るが如しさ吉田村か
てハ役小角も此御事を思とてまや有らむ
る淺間神社巍然と大社よ志て祭神は彦穗瓊瓊杵尊
大山祇命木花開耶毘賣命三座例祭四月上此申日也

といふ。近世は、櫻は、大木有て。五月は頃、花盛、ふして。五

六里、此外、まゝ。雲の如く見えしや、篤胤云、續後撰集、法印隆辨、四月

光日富士社にて、櫻の盛を見て、ぬじの根を、開ける花の、

あらひふて、猶時知、惣山櫻の、此と有ハ、此所を詠、ゆふや、

神名式、伊勢、圀朝明、郡布自、神社、櫻、 けて五合目、浅間、

神社有、も由有事、上ふ説る、が如し、 社、中宮を云、遙拜所、 鈴原邊、よ、此、ふ至、まで、

木立と云、古木繁て、天を覆ひ、蘿藤路を遮る。是を、め、上を

毛無を云、草木生ぜ、禽獸栖、焦石山を、あし、 險惡歩、難

し。寒威も殊、よ嚴酷、あれ、是、とり下、者も少、のら、強、

上、むと、ある者、は、九月、上旬、まで、此、に、到、る、是、故、よ、遙、

拜所、あ、○篤胤云、万葉、十四、駿河、歌、み、天、の、原、不、自、の、柴、

山、あ、の、く、れ、の、云、く、師、説、み、上、二、句、ハ、あ、の、之、れ、此、邊、を、思、

あり、木、之、暗、を、此、暮、よ、云、挂、と、依、あり、と、云、ま、き、此、邊、を、思、

て、詠、る、ふ、や、○玄道云、地藏、靈、驗、記、なる、藏、満、房、が、善、光、寺、

予行條、富士の麓、 野、み出、に、け、す、き、か、る、の、や、露

も、伏、て、往、來、の、路、も、幽、あり、仰、む、御、岳、半、を、雲、み、入、雪、膚、

も、た、ほ、ろ、よ、て、霧、麓、を、埋、て、 稍、み、里、を、隠、あ、日、の、暮、ぬ、る、

や、ら、む、と、覺、え、て、木、草、の、色、も、朧、み、見、え、て、遠、山、頻、み、色、を、

隠、し、入、世、遙、み、去、て、入、會、れ、鐘、も、傳、は、只、聞、く、と、し、 五合五

て、獨、暗、野、原、み、迷、け、と、記、せ、る、件、歌、み、思、合、を、し、 五合五

勺目と云、西、道、横吹と云、小御嶽、石尊、 鳥居、の、

三十町許、行、ば、大、門、お、出、 此、地、を、 富、士、山、の、半、腹、よ、北

了、ツキ、 突、出、ある、 峯、ふ、て、 社、地、二、町、許、 横、吹、を、め、 此、社、は、

鳥居、六、基、あ、 祭、神、を、 磐、長、姫、命、あ、 其、旁、に、 日、本、武、尊、此、

社、大、天、狗、小、天、狗、の、社、あ、 此、天、狗、社、を、享、保、の、比、ま、で、太、

郎、坊、正、眞、と、云、て、小、祠、あ、 近、年、甚、盛、大、よ、あ、れ、 拜、殿、幣、殿、を、始、華、麗、を、盡、し、信、心、

の、者、神、器、を、納、る、ふ、各、大、あ、る、を、競、り、銅、水、盤、方、一、丈、許、 斧

あ、 刃、此、長、二、尺、八、寸、廣、二、尺、四、寸、重、百、八、貫、目、柄、此、長、一、

丈、二、尺、太、一、尺、三、寸、神、劍、あ、り、長、六、尺、五、寸、鞘、六、尺、八、寸、鐔、

厚一寸二分徑、一尺四寸柄、二尺九寸重、六十貫
目、此外鈴、笛、錫杖、木履等皆此、み准て知るし。と云二里
許、西、御庭を云所あり。天狗の庭をも云。古木矮短ふし
て、枝葉茂密れる事。全く人巧み出ぬが如し。今と云三十
年以前まで。知者無し。中道巡、此者ぬと見出る。と
云謂ふ。信心堅固の行者、山の半腹を周廻、去依を中道巡、
と云、當社より、鳴澤村と云、了下の路あり。大門よ
り、頂上より登る舊道あり。今ハ攀る者稀あり。西風常ふ烈
し、れど、凡て五合目と云、上を風起む立、事能、匍匐
して、御息と稱して、甚怖る事あり。○玄道云、或物、此邊
み、經、嶽、不、淨、嶽、と云、も有、と云、り、此、經、嶽、ハ、日、蓮、年、譜、ふ、文
永、六、年、己、巳、是、歲、如、甲、州、吉、田、埋、手、書、妙、經、一、本、富、嶽、半、腹
以、為、後、昆、流、布、地、人、因、名、其、處、曰、經、嶽、是、也、ま、少、し、上、て
穴、小、屋、と、云、み、鰐、口、あり、古、道、と、云、掘、出、と、云、長、久、二、年、ま、て、百
六、月、一、日、を、刻、字、有、貞、觀、六、年、爆、火、を、り、長、久、二、年、ま、て、百
七、十、八、年、形、の、く、神、器、奉、納、あ、ま、む、爆、火、の、後、程、れ、く、登

山せし事知るべしとも。甲斐國志み記せ。又外記日記
ふ久安五年四月十六日丁卯近日於一院有大般若經一
部書寫、真、御、士、大、夫、男、女、素、緇、多、營、之、此、是、則、駿、河、國、有、
一、上、人、號、富、士、上、人、其、名、稱、末、代、攀、登、富、士、山、己、及、數、百、度、
山、頂、構、佛、閣、號、之、大、日、寺、云、又、五、月、十、三、日、一、院、於、佛、頂
堂、去、頃、所、被、寫、之、宸、筆、心、經、尊、勝、陀、羅、尼、并、人、所、課、如、法
般、若、經、書、寫、人、名、帳、等、被、啓、白、之、云、未、刻、於、大、貳、清、隆、公、
堂、被、供、養、云、く、結、緣、道、俗、如、雲、如、霞、云、く、其、後、富、士、上、人、末
代、賜、如、法、經、退、出、是、可、埋、駿、河、國、富、士、山、料、也、を、見、え、と、る
を、勝、隆、說、み、頂、上、東、方、ふ、經、岳、有、て、遠、夷、物、語、み、當、南、有、大
日、堂、此、處、稱、雷、鳴、嶽、而、有、經、塚、竝、淺、間、嶽、と、云、此、經、塚、を、
末、代、が、一、切、經、を、納、し、處、ある、と、云、り、末、代、が、事、ハ、地、藏、靈
驗、記、も、六、合、目、の、邊、を、總、て、鎌、岩、と、云、妙、法、寺、の、舊、記、ふ。
出、と、云、
永、正、八、年、八、月、鎌、岩、燃、を、有、た、是、あ、り、今、も、煙、立、事、有、と、謂
ふ。七、合、目、ふ、駒、嶽、あり。此、邊、北、路、益、險、あり。七、合、五、勾、を、り
甲、斐、北、八、分、嶽、亥、の、二、分、信、濃、の、淺、間、山、亥、の、八、分、此、地、よ
り、測、量、は、る、ふ、低、き、事、三、町、許、と、云、り、上、野、北、三、國、峠、子、の

影ふじの高ねおちし
 そめおけにと有り
 此に上を胸突と云其險難を想
 ぶし胸突を経て鳥居御橋と云所お到る。兩邊お櫻を立
 て石を盛て階此如くし。左右お扶手のに之お傍る升降
 びる外に。別當に富士郡大宮の大宮司あり。都て八合目
 とり上た一切駿河の持分て吉田口を関交。○篤胤云
 万葉十四の駿河歌よ不盡此條のいや遠長き山路をも
 云く霞ある布時の夜麻備尔云。頂上は周廻一里おして
 云等詠るを此邊お思合べし。
 數峯兀立せに。お戎八葉と云詣人訛て八料と云然れを
 八峯有非交。中央お空坎あり。内院を云深十町餘是を
 忽お雲を生じ。忽お風を生じ。坎中お南を差出と依
 岩のに。虎石とも獅子岩とも云。都良香朝臣此記ふ。石體

如蹲虎を有。是を謂の。八合目とり上お異鳥あり。内院
 る事無く雲際お群飛去る。絶巔有八葉。八葉冬夏有雪と
 此如し。○玄道云。常庵集。お絶巔有八葉。八葉冬夏有雪と
 記し。富士日記。お底ハ。幾千仞とも。量難し。古煙の
 せば。窪の流る音。お聞え。は。松の群。立。お秋風。調る音
 立し。跡と知れ。り。鳴澤ハ。何處と知。糸。多。大。お崩。落。る音
 谷お響て流る音。お聞え。は。松の群。立。お秋風。調る音
 うお聞おされ。り。お聞え。は。松の群。立。お秋風。調る音
 おに。と云。ど。と。お。わ。お。さ。は。事。有。む。も。思。成。れ。祿。む。と
 迎の割石。少の川。原等云。處。有。て。巡。拜。む。お。り。又。麓。を
 り登る雲。ハ。少の川。原等云。處。有。て。巡。拜。む。お。り。又。麓。を
 吹出せ。必ある。と。あ。む。烟。を。絶。て。お。し。や。と。問。む。今。も
 非時お雲。發。霧。覆。て。鬱。陶。き。中。より。何。お。る。又。扶。茲。日。記。お
 らむ。暴風。し。も。吹。出。て。覆。る。雲。霧。を。四。方。の。虚。空。お。息。吹。お
 去さ。ま。氣。疎。と。も。妻。じ。と。も。云。お。げ。お。よ。く。斯。間。断。お。く。彼。處。ハ。底。と
 る。抑。此。虚。穴。を。風。穴。と。云。お。げ。お。よ。く。斯。間。断。お。く。彼。處。ハ。底。と
 依。て。お。り。き。り。暫。時。見。る。間。お。げ。お。よ。く。斯。間。断。お。く。彼。處。ハ。底。と

み。數千丈。此内院。み。顛墮。去。跡。あり。谷。村。此。農。民。森。島。子。懋。
グ。言。ふ。吾。ハ。小。き。百。姓。お。れ。ど。も。無。事。み。百。姓。せ。せ。む。と。
思。ふ。子。ハ。富。士。此。登。山。を。為。さ。せ。じ。云。小。沼。村。淺。間。の。祠。
官。小。佐。野。子。延。グ。言。み。富。士。山。は。下。を。り。形。計。を。見。む。き。山。
あり。夫。故。み。古。歌。み。も。上。子。登。れ。る。歌。を。一。首。も。見。侍。び。と。
云。し。も。理。あり。郡。内。の。人。去。ら。斯。の。如。し。他。邦。の。人。を。く。思。
を。し。○。篤。胤。云。此。言。甚。味。有。ど。其。説。お。し。他。邦。の。人。を。く。思。
明。院。の。行。智。の。言。み。此。頂。上。み。登。て。在。し。程。何。と。あ。く。呼。吸。
此。扱。まる。心。地。お。び。き。と。云。ゆ。案。然。も。有。む。程。何。と。あ。く。呼。吸。
困。人。新。庄。道。雄。み。此。事。を。探。る。み。吾。も。然。思。り。や。云。き。此。謂。
も。あ。り。み。盡。し。難。し。ゆ。て。万。葉。二。十。の。駿。河。歌。み。和。伎。米。故。
と。ぬ。り。我。が。見。し。宇。知。江。須。流。須。流。河。の。祇。良。を。苦。不。志。
久。米。阿。流。可。や。有。も。此。山。を。詠。る。み。や。○。玄。道。云。橘。三。喜。記。
み。凡。て。十。二。峯。有。と。云。也。そ。も。勝。隆。の。委。く。記。せ。る。物。あ。也。
是。と。云。元。此。路。を。下。て。八。合。目。み。至。也。に。む。り。道。を。云。所。を
下。ゆ。走。也。草。鞋。と。云。も。此。三。重。計。扱。り。て。一。步。進。れ。ば。砂。礫
と。共。み。走。下。ゆ。事。七。八。尺。此。時。上。と。り。砂。石。の。轉。落。る。事。あ

也。後。と。下。ゆ。者。聲。を。か。け。て。之。を。告。ぐ。然。ら。げ。ま。ば。巨。石
此。爲。み。壓。死。せ。ら。ゆ。者。何。也。然。て。疲。を。覺。れ。む。處。み。隨。て
仰。ぎ。卧。し。或。は。杖。を。石。隙。み。撐。み。如。此。し。て。下。ゆ。事。一。瞬。數
百。步。み。志。て。五。合。五。勺。目。砂。篩。と。云。所。み。下。て。止。る。是。と。云
左。み。下。れ。む。小。御。嶽。右。を。中。宮。み。下。て。初。此。道。を。下。向。は。を
云。ゆ。も。て。此。山。此。大。凡。を。知。る。し。是。富。士。山。内。記。と。云。書。一
り。其。凡。例。み。通。篇。森。島。子。與。グ。郡。内。志。富。士。山。の。條。み。本。扱
き。更。み。文。を。修。し。て。其。冗。長。を。省。き。且。客。中。耳。食。を。罪。を。を
以。て。其。缺。典。を。補。ふ。看。者。余。の。疎。漏。を。以。て。子。與。を。罪。を。を
事。あり。れ。月。所。識。と。見。え。又。中。み。江。湖。浪。人。と。も。有。ど。何。人
を。云。事。を。知。也。今。此。み。取。所。を。其。書。の。十。分。一。も。足。也。其
仏。法。み。起。る。事。蹟。行。者。の。妄。誕。み。涉。る。事。を。む。一。向。み。捨。て。
今。の。要。有。所。の。み。引。約。て。記。せ。る。お。也。○。玄。道。云。凡。て。此。隔
搔。録。ハ。專。と。北。口。の。み。を。記。し。て。表。口。東。口。南。口。等。の。事。を

記さまばそを遠夷物語駿河新風土記等み就て見るし
又柴田漢土人も五岳を因鎮と崇る正皇因ふて鎮守也
と見て富士山名義ハ吹息山を正皇眞人の説あり古
ふ靈氣を吹出た現形も亦富士と云稱乃歌ふ相合バ一
の鎮十方座神可聞を詠ハ特り皇因の鎮あり皇因を萬
の全地球の鎮と云ハ辨ざる者心も喜ハ皇因ハ一島
のこ見おれて神理を辨ざる者心も喜ハ皇因ハ一島
あま他ふ廣大なる因を辨ざる者心も喜ハ皇因ハ一島
ぶまむ遙み狹を以て美惡を評し難く云ふ高らむ仍比
て尊卑を定むる腹脊鬢なぞハ體廣くと云ふ人身を仍比
て譬予むみも尊き如く老臣ハ磐石の数と君及むる
頭を小おれども尊き如く老臣ハ磐石の数と君及むる
は璧の方寸なる正されど如く老臣ハ磐石の数と君及むる
ざるも同じ理お正されど如く老臣ハ磐石の数と君及むる
蓋天地間獨吾天皇萬古一系莫有革命者是其無疆之鎮
亦有與于此哉特立天下而無比倫不亦宜乎と以予亦

げふ謂をれあ依言ふこぢと云へり委しくハその暑
せる本教大基を見ふこぢと云へり委しくハその暑
兩月此講社お富士山登る講社何まで近き殊お流
行さる此講社お富士山登る講社何まで近き殊お流
近久光と云ぬる有て此年應仁以前の因長崎に谷川左
見て深く歎き及ぶ再治平る世に難行を修して神明
の眞助を祈むと思立きおさらぬ難行を修して神明
へ多助を祈むと思立きおさらぬ難行を修して神明
を設りて此志を遂しめむやと明此身脆弱く病さ
お其妻の夢お北辰胎お宿るやと明此身脆弱く病さ
丑の正月十五日お辰胎お宿るやと明此身脆弱く病さ
左近の改め晩年お至り角行眞人東覺を竹松といひ後辛
講社の開祖とあまると教導のき彼大願を永祿元年お
角行の性質を孝心深く専ら父の心を常陸國新治郡土浦
八歳の時家を辭す豊榮を昇固を拜み周遊り泰平治郡土浦
の旭臺を黙禱りそまを固を拜み周遊り泰平治郡土浦
むの旭臺を黙禱りそまを固を拜み周遊り泰平治郡土浦

佛の靈場を拜禮す終に富士山に登りて天嶽中道人
穴八湖を引續きて巡らむ再長崎を立出でて越前の國
長崎も引續きて巡らむ再長崎を立出でて越前の國
母と引續きて巡らむ再長崎を立出でて越前の國
まゝ引續きて巡らむ再長崎を立出でて越前の國
行々引續きて巡らむ再長崎を立出でて越前の國
ぐ瘡を教諭して癩の病を祈禱の力にて癒しし
いふ名を教諭して癩の病を祈禱の力にて癒しし
二荒山の湖水を霊として又難行を修むる際宇野宮の
野運平と云ふ靈を夢告修むる際宇野宮の
も物言と云ふ靈を夢告修むる際宇野宮の
行を信仰てと云ふ靈を夢告修むる際宇野宮の
て後師弟三人相携ひて又富士山に入て是をりたる
復むこまを此山の神願奉り明々暮れ天正此頃と
無く織田また此月の追次ぎて徳川公世祈禱の功天
あり織田また此月の追次ぎて徳川公世祈禱の功天
下はじめ豊臣此月の追次ぎて徳川公世祈禱の功天
空のらぶして遂に父の宗國大願を成就せしめ祈禱の功天
歡び且皇國を万国に大願を成就せしめ祈禱の功天

る旨をも覺知り天地之始國土之柱天下參國治大行之
本也といふ幽微言を遺し保三丙戌の六月三日人
穴の中を歸せり行年百六歳ありき其道統ハ日珙
心月行を相續ぎ元禄享保の頃とありて村上清とい
予は八派と伊藤食行といひて盛派を二の富士の
八更八講と呼ぶ一派毎先達と稱す俗に富士の
も修驗者擬し白衣を着鈴を振厄呪文陀羅尼やりの
物を誦しつゝ富士登山又災厄疾病等小羅尼やりの
祈攘を此徒ひ丹誠を凝して焚上防ぎ摘み効驗を見
ふ修法を行ひ丹誠を凝して焚上防ぎ摘み効驗を見
るおとあひ光清ハ江の振ひて衆席の信仰を受け且
諸侯の代参を爲て威權を振ひて衆席の信仰を受け且
の行を伊勢承し家業を勤むる暇を以て知識の門を敲
て妙説を相承し家業を勤むる暇を以て知識の門を敲
原の教を布民を了別めて各業を立かして四民同等の
勵との風を布民を了別めて各業を立かして四民同等の
子と云ふ傳て自富士此派も亦いとは八年花
癸丑の七月十七日自富士此派も亦いとは八年花

行し其の食行れ遺傳ハ花子よ正花形浪江といふ人小授
て其家名をも繼しめらば此人俗稱を伊藤伊兵衛号
を参行と稱して示教義の眞面目を解悟正俗講徒が煽
焔を疎て江戸三谷の陋屋に隠れ其教旨を傳べき人を
俟らるに武蔵国足立郡蘆谷驛なる小谷庄兵衛三志と
云人文化六年己巳正月、小尋來て弟子となす遂
お其教旨を傳授さば此三志の行状を其婿志毛正應が
撰る鑑徳碑に詳おゆ其此文云道之浩々無所不在而行
之則存乎其人謹按斯道肇角行而興於食行傳之至於吾
祿之環堵索然風日不蔽捫虱而坐傳道無人翁幼而穎敏
矯然以道爲念父不得爲子相敬如賓出入諸家求所謂道
苟能遂私淑於人知世有參行傍搜數年立雪沐雨竟遇參
行師資相得道統有繼爾來四十年于此五畿七道木鐸不
已西極九州東抵八州乃入京師播紳賜服遂至崎嶇漢容
寄詩化其教者十餘人此豈勉強期月間之所能哉抑精
誠之動天地感鬼神洗人以此善者然也嗚呼翁夙興夜寐夏
不扇冬不爐七十餘年如一日其出也百舍重繭蓬累而行
所至以忠孝力耕爲教以慈儉不爭爲行而志氣卓尔卒然

遇人王侯失其貴情夫有立志嗚呼其可謂至德也已矣以
天保十二年辛丑九月十七日卒葬武州蘆谷郷地藏院先
塋之側諡曰清徳諱三志祿行其號也云くと云りまこと此
人富士ふ登て冢家の安泰を祈ことと一六十一度ふ及
り晩年ふ至て活眼を開き前代相承の混淆説をことお
と云ふ又此祿行を賞して葉室顯孝卿清岡長親卿高田
與清清人沈萍香あどと贈る歌文詩賦あどあべ總
て此等の事ども委む徳大寺莞爾の著せる不盡道別お
就て見べし○頼因云柴田花守主ハ此教統を承て泉行
の道徳を察行する事世人に熟知する如く甚感志了
又神名式ふ載れ祿と信濃因淺間山ふも磐長姫命此
鎮坐由世ふ知人も多く且其邊ある古老の傳ふも上代
ふ近江れ湖と諏訪れ湖と一夜ふ出來て淺間山と富士
山を涌出し甚く荒るべしこの時天子驚せ給ひ八

百万神を集めて問給ふ。伊勢国浅久間地坐。大山祇神告くは。我ふ二女何也。姉を磐長姫弟を木花開耶姫を云此女等を住せむ爲ふ。我力ふて。二山を造也。姉をば信濃の山ふ。弟をば駿河山居志久むと白し給む。兩山ふ姉弟をぬり別て。御子あはると有ける中より擇て二人拔。二柱は姫神ふ添給はる。此山れる二人の御子ハ。世の永人ふて。今も現ふ御坐を。時くふ見旅人も有せ云也。
此を往し文政四年の四月。己殊ある故由有て。高橋正雄。小山安貞。石井篤任。子供とあて。おざと詣て奉る時。山掛の宿ふて。信州浅間嶽の記と云。物を得て也。其發端。岩村田在の茂作が家傳ふ。古記の説とて。載と協文を引約。又其邊。此古老等。問聞る事をも。少く交て記せるあ也。此古老は傳説ふ。上代

よ二は湖の出來て。二の山は成出る也。謂は古也。年代記。富士山縁起等ふ云。遠を同説ふて。上ふ論如く取ふ足。
其を此二山の人。世とあて。始て涌出せめと云。事此。異きを信ざり。ハ非也。彼年代記あど。謂る。天皇命。ち此御世此事と云れ。常陸風土記の故事。又神世。建御名方神を諏方海まで迫到り。と云。故事有ふも。叶。万葉。天地の分まし時。神左備て。然有せ。八百万神云くと詠る歌。ふも合ざれ。むあ也。 を集めて云也。以下は。實然も有は。く惟符さ。は。事等何也。其は此二山は。上世と。焼荒る事。數ふ也。し。我思。彼古縁起等。謂る。天皇命等。御世遠か。ら。二山の甚く荒び。焼。は。縁程。小。例。此如く。太兆。ふ。占問。坐て。大山祇神の御心を。協事を知し。看し。御子等。ふ。命。を。祀。志。久。給。は。事。

の有し哉。土人此かく訛傳ふゆふぞ有べき。富士山の時、
事の上み引出る諸書み所見るが如し。浅間山の焼く時、
荒ふる事彼記み猶委く記して、浅間山の戌亥北風吹、
毎み必荒る事甚し。弘安四年六月九日の暮方山より西、
み黄ちる雲出て、人物草木皆金色の光を映せ。諸人山、
上字仰見れむ。石とも木とも分る光を映せ。諸人山、
見えぬ。夜刻とも焼出して、追分小諸と南戸等、
里餘の間砂灰ふ。火石今みあ。北を山の麓まで押出、
して今此所を石どほ。正と云を云るを始。其と古代此、
二度の大焼の年月時日有。趣をも委く舉て。右を古代此、
記録み見え。嶽を絶頂凹みして。天明三年の大焼。此、
及び浅間嶽を絶頂凹みして。天明三年の大焼。此、
此を御釜と云。端の廻凡一里餘あり。中なる谷。常ふ煙、
出る時を硫黄解て覆。凡一里餘あり。中なる谷。常ふ煙、
とめ釜の中次第砂積り。底をりも砂石解。上り。數年、
此大焼止て。後み益く埋り。近き年頃を。釜中み。巖石塞が、
りみ凸み成し。は不審き事と。口くみ。間み。此大焼有し。
と云。○玄道云。中右記み。天仁元年九月五日。左中辨長、
忠於陣頭談云。近日上野国進解狀云。固中有高山称麻間、

峯而從治曆間。峯中細煙出來。其後微々也。從今年七月廿
一日。猛火燒山。顛其烟属天。沙礫滿固。燬積庭。固内田島、
依之已滅。亡一固之嘆。未有如此事。依希有之。怪所記置、
也。と見え。又全月伊豆。固ある海上の神火の變み。諸固、
の鳴動。事を記され。て。下人。説云。駿河。固富士山。并信濃、
固朝間。峯燒落之。昔其聲振。動遠聞。天下ともあ。和漢合、
運み。全八月十七日。空有聲。如鼓。數日不斷。年代記み。從八、
月十七日。天鼓鳴。四十餘日ともあり。必此變の事。あ。正、
天武天皇紀。十四年三月。此條。是月。灰零於信濃。固草木、
皆枯焉。と有は。信濃地名考。云。は。如く。浅間山。此焼る。を、
おそ云。疑。おく。此山の焼る。故。おや有らむ。伊勢物語、
ふ。信濃ある。浅間の嶽。ふ。立ち。烟を。ち。おち。人。此。見。や。と。答、
ぬ。後。撰集。ふ。は。る。が。信濃。外。る。浅間。此。嶽。も。燃。あ。れ。バ。富士、
此。煙。の。の。ひ。や。無。ら。む。拾遺集。ふ。紀。貫。之。い。お。と。て。の。我。が、

戀やまむ。千磐破る。淺間此の煙絶をも。此山此煙を
詠歌猶數首の也。地名考。絶頂の大坑。常。煙立。上。巴。
坑中。硫黄。満。時。地。火。突。發。し。大。石。布。と。走。巴。砂。石。を。降。
して。麓。を。焼。く。其。音。數。百。里。も。聞。也。貫。之。忽。し。の。詠。れ。し。千。
磐。破。る。淺。間。の。嶽。煙。の。立。つ。き。て。い。く。千。載。り。震。動。雲。
を。焦。ち。純。抑。是。山。を。固。の。真。中。お。出。て。深。の。ら。富。士。
路。其。肩。を。周。れ。ぬ。路。行。人。も。高。き。を。知。れ。ど。遠。く。眺。バ。富。士。
み。於。今。夏。月。の。雪。を。希。れ。ま。と。立。春。此。後。百。餘。日。霜。互。て。
雪。の。朝。此。如。し。又。中。秋。を。霜。寒。く。或。は。霜。早。く。來。る。毛。作。
を。刺。去。故。耕。作。の。日。せ。ま。る。と。云。巴。玄。道。云。道。興。華。后。
廻。固。雜。記。今。ハ。世。の。煙。を。絶。て。信。濃。の。比。淺。間。の。嶽。ハ。名。
の。み。立。け。巴。と。見。也。或。人。此。因。て。文。明。の。比。は。煙。絶。し。事。
も。有。し。久。小。縣。兩。郡。へ。跨。巴。裏。ハ。上。野。固。吾。妻。郡。を。拔。て。
表。ハ。一。度。大。燒。あ。巴。其。時。は。千。雷。万。雷。の。如。く。巨。木。を。拔。て。
年。ハ。横。と。大。石。を。飛。して。空。を。翻。る。其。煙。幾。万。丈。と。も。あ。
谷。ハ。上。巴。半。天。よ。巴。亂。火。を。降。し。て。い。と。去。け。ま。じ。く。燒。沙。
石。を。降。去。事。盆。水。を。覆。去。の。如。し。又。烟。常。ハ。東。子。靡。く。を。西。

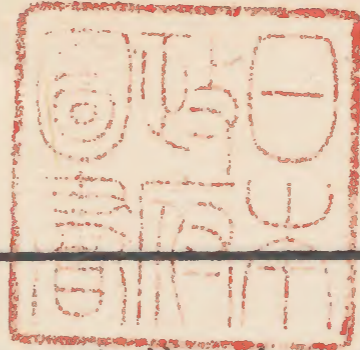
へ。靡。く。を。凶。と。巴。四。月。八。日。巳。刻。ま。で。諸。人。齋。し。て。詣。拔。
午。時。及。バ。燒。出。る。事。あ。れ。む。あり。と。云。和。漢。三。才。圖。會。ハ。
淺。間。山。高。四。里。半。腹。以。上。常。燃。而。薰。煙。无。休。期。磐。石。燒。飛。如。
浮。石。絶。頂。凹。而。灰。火。散。每。四。月。潔。齋。登。山。人。皆。以。竹。筒。貯。水。
携。上。以。浸。草。鞋。防。火。氣。也。有。始。此。山。の。事。ハ。何。く。れ。の。
書。も。多。く。見。也。又。扶。桑。畧。記。光。孝。天。皇。仁。和。三。年。七。月。
三。十。日。信。乃。固。大。山。頽。崩。巨。河。溢。流。六。郡。城。廬。拂。地。漂。流。牛。
馬。男。女。流。死。成。丘。と。有。ハ。或。人。も。云。る。如。く。此。山。あ。る。べ。き。
事。近。く。天。明。三。年。度。の。變。字。も。思。合。せ。て。知。る。め。り。此。は。て。
條。の。御。紀。ハ。漏。と。係。ハ。抄。本。も。全。書。非。れ。バ。あ。り。は。て。
彼。古。老。此。傳。ハ。伊。勢。固。淺。久。間。の。地。お。坐。巴。云。く。を。云。係。を。
疑。れ。く。彼。朝。熊。山。よ。て。此。を。殊。も。由。の。係。言。お。巴。誠。も。上。代。
み。加。る。由。緒。の。無。存。は。し。ら。ば。伊。豆。駿。河。信。濃。等。此。相。放。
れ。係。固。く。も。同。じ。山。名。を。負。て。同。じ。神。等。の。坐。は。き。因。お。巴。
物。を。や。然。れ。む。此。を。有。ぐ。中。ハ。珍。死。説。お。巴。猶。彼。朝。熊。社。の。
所。ハ。注。せ。係。説。

どもをも立返り見て思合べし。○頼国云詞林采葉抄よ
富士権現ハ信濃国浅間大明神と一躰兩座の垂跡よて
おとしまはとや。兩山共み浅間大神
と申故也と有る此師説ととく符り。又彼漆給し二人
此御子ハ世に永人とあてて。今ふ此山ふれを安茂時
見る人有と云事も尋常此事識等は疑思も有惚べし。然
れど此は異国のみ。然依仙人此有ふ非。皇国も往
く有て。然しも珍から惚事あて。其は殊小諦ある實事と
もを擧て考證せる物有。此ふを記さ。彼浅間嶽の記
の方。谷とも非。少るあ。わみで。林の深く幽。郷。現
るを土人は魔所と云。あれど。宋。其。二人。此。幽。郷。現
み殿舎を無れども。土人。了。ゆ。麗。き。宮。殿。の。霞。み。映。れ。る
字。見。し。者。あり。或。を。雞。の。時。を。扱。ぐ。る。聲。を。聞。事。あ。て。又。琴
笛。の。音。等。の。聞。知。る。事。も。有。て。と。記。し。又。其。仙。人。等。を。見。し
者。此。言。ふ。身。此。長。を。一。丈。計。り。て。太。刀。を。帶。る。が。黒。髪。を

長く垂とりと云とぞ。天明年中の事や。輕井澤驛。山
犬。權。十。と。名。を。得。る。荒。を。の。お。其。男。子。を。連。て。麓。に。鶴。立
張。て。居。け。る。み。右。の。有。状。あ。る。異。人。其。小。屋。前。を。通。し。ぐ。立
返。て。權。十。を。呼。出。し。草。鞋。此。紐。を。結。得。さ。せ。と。云。權。十
心。得。て。結。ら。る。み。異。人。其。左。足。を。上。て。結。し。片。手。を。權。十
の。頭。上。に。突。こ。ゆ。み。其。痛。堪。難。き。を。忍。て。結。畢。て。右。足。を。い
異。人。の。付。さ。る。指。三。本。此。あ。と。深。く。凹。こ。て。生。涯。直。ぐ。山。犬
を。手。取。み。せ。し。程。此。者。あ。れ。ど。も。其。後。を。恐。て。彼。所。の。麓。に
て。鳥。と。依。事。を。止。さ。り。や。直。了。相。見。し。老。人。も。語。り。て。○玄
道。云。中。陵。漫。錄。み。全。国。あ。る。戸。隱。山。み。て。徳。七。ち。ふ。者。が。二
人。異。人。を。見。し。み。一。人。は。十。七。八。許。み。て。絹。布。を。著。短。刀。を
佩。き。甚。美。麗。き。容。貌。あり。し。と。載。る。も。よ。く。似。と。る。事。あり
さ。て。永。人。と。ハ。仁。徳。天。皇。及。建。内。宿。祢。命。の。御。歌。み。見。え。て
山。人。と。云。ふ。全。く。長。生。久。視。の。方。を。得。て。神。仙。の。位。み。至。れ
る。眞。人。の。稱。と。聞。也。さ。て。早。く。新。井。君。美。も。論。る。如。く。上。代
事。ハ。大。事。あ。る。時。ハ。必。皇。后。皇。子。等。み。命。せ。て。事。執。せ。賜。し
因。て。別。記。置。る。物。あ。て。さ。て。仙。等。の。事。を。も。此。ら。の。師。説。み
情。状。を。し。精。思。考。究。し。て。慇。懃。み。提。擧。教。誨。されしは。後。生

御嶽石尊とて。石長比賣命も坐ませば。淺間嶽も。石長比賣命。其主神もは坐せど。必佐久夜毘賣命も坐せむ事。彼力を合せて御坐謂もて悟。其今しも其社おそり云。説も有。幽より云。し久給。形らむもえ知。○玄道云。俊頼集。雲をれ。ぬ。淺間の嶽も。秋くれ。む。烟をわけ。常。烟立所也。而駿河の富士北山も。常。烟立所也。て。お。そ。い。あ。け。て。富。士。山。を。佐。久。夜。毘。賣。命。其。主。神。と。坐。に。小。御。嶽。石。尊。と。て。石。長。比。賣。命。も。坐。ま。せ。ば。淺。間。嶽。も。石。長。比。賣。命。其。主。神。も。は。坐。せ。ど。必。佐。久。夜。毘。賣。命。も。坐。せ。む。事。彼。力。を。合。せ。て。御。坐。謂。も。て。悟。し。其。今。し。も。其。社。お。そ。り。云。説。も。有。幽。よ。り。云。し。久。給。形。ら。む。も。え。知。○。玄。道。云。俊。頼。集。雲。を。れ。ぬ。淺。間。の。嶽。も。秋。くれ。む。烟。を。わけ。常。烟。立。所。也。而。駿。河。の。富。士。北。山。も。常。烟。立。所。也。

有る件山坐神を淺間大神となづく。と云。さて朝熊神社考。ふ。淺間より西七八里許。眞田を云。郷あり。其辰巳。方。ふ。富。士。淺。間。の。山。有。五。穀。豐。熟。を。祈。る。事。あ。り。宮。と。云。有。て。年。み。三。度。山。籠。し。て。五。穀。豐。熟。を。祈。る。事。あ。り。と。云。ふ。木。花。開。耶。毘。賣。命。を。記。て。子。持。明。神。と。申。云。四。月。朔。日。祭。禮。あ。り。又。淺。間。峯。と。り。一。里。許。下。湯。平。を。云。地。石。上。小。祠。有。り。八。月。八。日。齋。登。諸。人。穀。を。祈。申。云。此。石。長。姫。命。ま。は。天。明。の。變。も。御。靈。代。と。お。ん。じ。き。石。邊。小。凡。て。火。石。も。來。り。し。と。永。正。大。永。以。來。の。山。焼。を。大。小。凡。て。三。度。ふ。及。じ。り。し。と。此。處。ハ。恙。坐。せ。し。と。砂。を。貢。土。入。の。説。ふ。富。士。山。よ。り。此。岳。日。毎。三。升。抄。此。砂。を。貢。一。文。字。も。引。て。富。士。山。に。至。る。事。有。神。の。み。ゆ。と。云。傳。ふ。余。も。正。しく。唱。し。み。や。と。説。り。案。も。件。師。説。の。左。券。田。を。停。名。と。唱。し。み。や。と。説。り。案。も。件。師。説。の。左。券。と。も。為。は。く。お。ん。じ。の。縁。と。説。り。案。も。件。師。説。の。左。券。勝。志。等。因。ふ。群。馬。郡。抄。藻。塩。草。も。有。て。東。鑑。ふ。沼。田。太。郎。全。七。奈。倍。能。を。詠。み。八。雲。御。抄。藻。塩。草。も。有。て。東。鑑。ふ。沼。田。太。郎。全。七。抄。利。根。郡。み。渭。田。郷。奴。末。太。と。有。て。東。鑑。ふ。沼。田。太。郎。全。七。



郎等見え今も沼田城趾有と云又勢多郡荒山下小田
 藏嶽又號小路嶽祭淺間神三夜澤祝奈良原氏家有小路
 原北條制札云駿河富士淺間大〇〇赤城山之内號小路
 之嶽地へ御飛之由數ヶ度御神託无疑之段三夜澤社人
 一全注進云永祿十二年閏五月廿三日と有と記し全
 圀帳よ吾妻郡從三位淺間明神利根郡山神明神坐し
 式ふた那波郡火雷神社まし又但馬國養父郡淺間神社
 和名抄よ淺間郷有全氣多郡山神社雷神社坐も共
 よ由有げぬま下野國ある室八嶋も佐久夜毘賣命
 を祀ると羅山文集よ云ふおど其若正くバ上考よ由有
 て聞ゆ〇忠行云淺間山よハ今も櫻樹いと多く西南の
 麓塩野村よ淺間社有て其産土神とまは師説ふ攷合る
 しかくて彼記ふ上古は御社も盛るべしと聞えとゆよ
 如何なる事よ也此社の名残ば神名帳よも載さまざ殊
 よ中古の亂世とゆ漸ふ社も崩れ失せて今は頂上よ少
 けた石宮と香掛と登ゆ麓よ鳥居一基有れみりて社

人も形くかく麤略ふれまゆ故ふ神れ御怒ありて時く
 尔山頂と石泥を吹出して國民の災難とれるは悲死
 事ありを記せゆ也實よも尤れる長息ありし但其氏子
 村くの古老ども天明年中よ山の焼出とる時まで
 社有しとも云ゆ今社人もれ故よ其邊此寺僧山伏
 ちど推して己が仕る神れおと云れし又其者ども富士の
 榮えを羨み且山名多淺間と申よ就て佐久夜毘賣命と
 此み誣る故ふ今石長姫命を云事を知らざる者も多か
 べと歎き語べ死
 ○門人井上頼圀云此卷を櫻木ふ彫せるゆハ信濃圀伊
 那郡ある實行教會員なり

門入井上... 古史成文... 神代部... 古史傳... 古史本辭經... 古史徵... 古史年歷編畧... 古史成文... 神代部... 古史傳... 古史本辭經... 古史徵... 古史年歷編畧...

木邨嘉平刻

伊吹酒屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

◎古史成文 <small>神代部</small>	三卷	◎古史徵 <small>神代部六冊 問題記五冊</small>	十一卷
◎古史傳 <small>自初卷至 九八卷</small>	七秩刻成	◎古史本辭經 <small>五十音 義訣</small>	四卷
◎神代系圖 <small>折本 繪入</small>	一帖	◎同 <small>掛軸料</small>	一枚
◎靈能眞柱	二卷	◎神拜詞記 <small>折本</small>	一帖
◎太元圖說 <small>石摺</small>	一幅	◎古語拾遺投訂	一卷
◎祝詞式正訓	二卷	◎神字日文傳 <small>疑字 篇附</small>	三卷
◎弘仁歷運記考	二卷	◎大祓詞正訓 <small>折本</small>	一帖
◎天津祝詞考	一卷	◎鬼神新論	一卷
◎春秋命歷序考	二卷	◎入學問答 <small>附著述 書目</small>	一卷
◎赤縣太古傳 <small>初 帙</small>	三卷	◎赤縣太古傳成文	一卷
		◎三五本圖考	二卷

○刻成書目

○全

○三神山餘考	一卷	○古今妖魅考	三卷	○古道大意	<small>講本</small> 二卷
○俗神道辨	<small>講本</small> 四卷	○靜乃石屋	<small>同</small> 二卷	○西籍概論	<small>同</small> 三卷
○出定笑語	<small>講本</small> 凡六卷	○伊吹於呂志	<small>同</small> 二卷	○悟道辨	<small>同</small> 二卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○童蒙入學門	一卷	○三易由來記	二卷
○鑿宗仲景考	一卷	○太畧古易成文	一卷	○太畧古曆成文	一卷
○大道或問	一卷	○皇典文彙	三卷	○赤縣歷代尺圖	一枚
○古學二千文	<small>講例</small> 一卷	○古易大象經正文	一卷	○說文解字序	一卷
○宮比神御傳記	<small>御影</small> 一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○日女島考	一卷
○古道訓蒙頌	一卷	○神德畧述頌	一卷	○叶古要略	一卷
○荷田翁啓文	一卷	○草木撰種錄	一枚	○魂魄分屬圖說	<small>石</small> 一幅
○祭典略	<small>祭文例</small> 一卷	○千字文	一卷	○諸職祖神号	<small>石</small> 數種
○神字原五十音	一枚	○皇祖宮所考	一卷	○故大人遺訓措物	數種

明治二十年四月廿五日出版御届
同 五月八日刻成

定價六十二錢

續考人

愛媛縣士族
矢野玄道

愛媛縣下喜多郡
阿蘇村二百三十番地

東京府士族

平田以志

東京府下京橋區
築地三丁目廿五番地寄留

出版人

